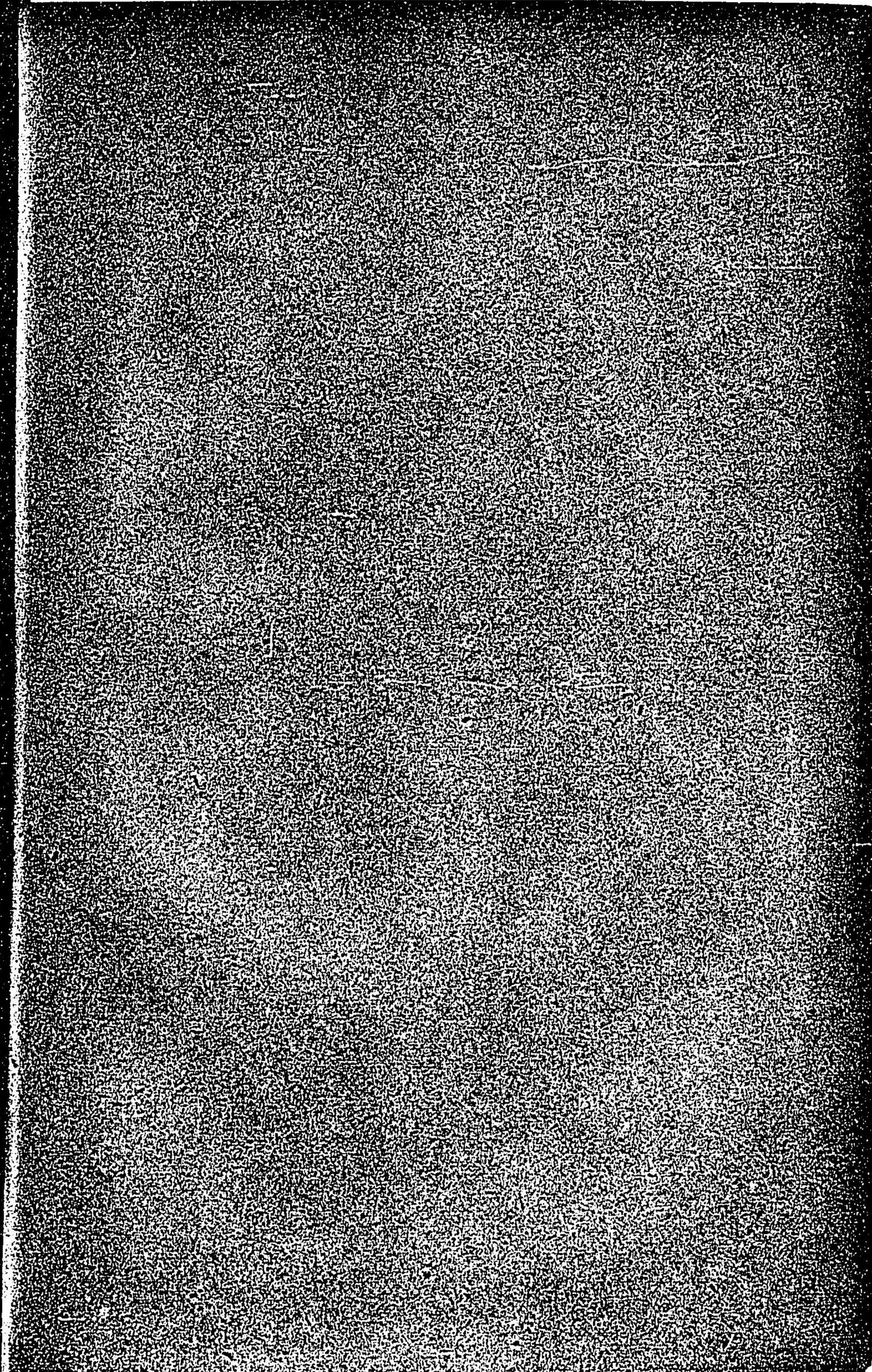
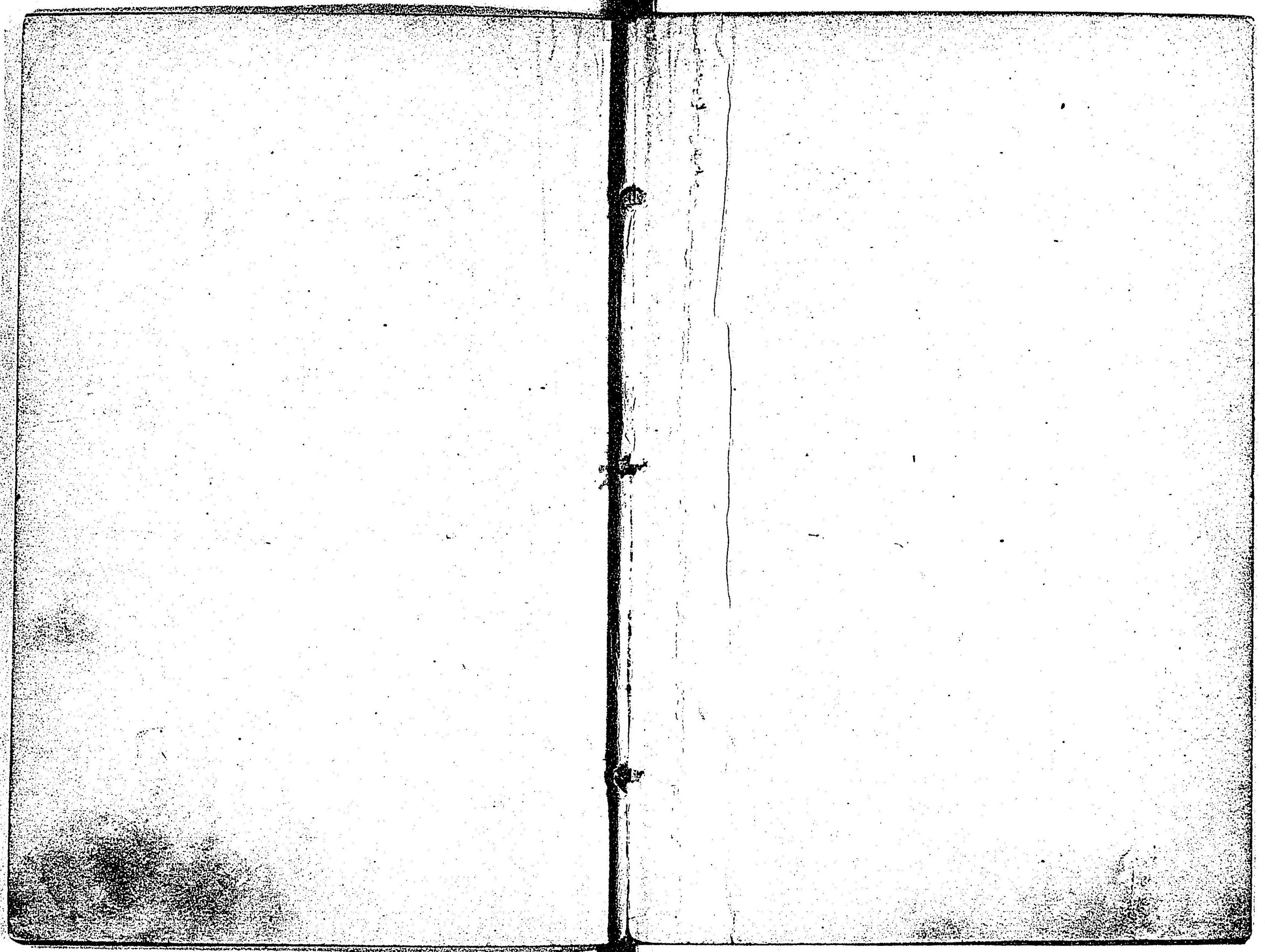


324
67

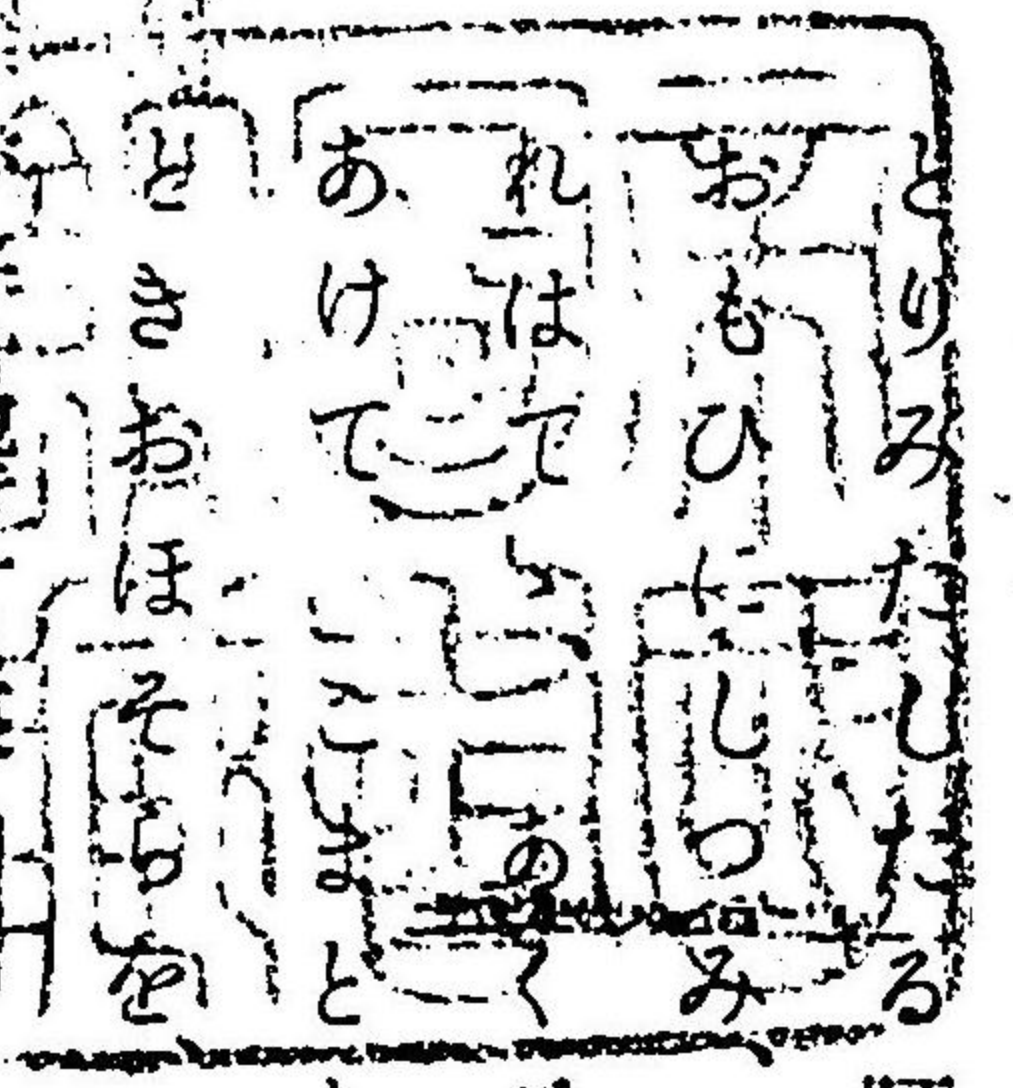
禪 と 修 養

釋
悟
庵
著





禪と修養のはしがき



とりみたりたる陋室に、とちこもりて、ひたすらも
 おもひたしつみあるはよみものかきものなどにつ
 れはてはあくびのみもよふところ、やをら障子おし
 あけてこまより、くびさしのべ、一碧ぬぐふがこ
 ときおほそらなながめやる、こちよさ、われとわ
 が紅塵十丈中の人間たるをわすれ、佛にも神仙にもな
 りたらんやうにおぼゆる、この一刹那の爽快なるこ
 ちの、ながくなにごとのうへにも、相續しゆくを、禪
 のさとりとやいふべがらん、釋迦老師の見星成道とい
 ふも、香巖の撃竹悟入などいはんも、みなかゝる心象

21 1 15
 内空

の、とこしなへにつくやうなりたるならまし、いま
悟庵師が、ふみかきてひとにしめすも、またかゝる習
慣をつくらしめんとてのわざならんかし、さるをあや
まりて、このふみにこゝろうばはれ、つみなくて室内
幽囚のひとゝもならば、なか／＼にうたてかるべきわ
ざなるべし、あはれ師をしり師をつみするは、それた
だこのふみならんかも、

丁未臘月

藹々居士 大内青巒しるす

例言數則

- 一。本書は禪學を靜動の兩方面より絮説し、禪の神機を活用して、以て人格修養に資せしめむとの目的により叙述せしものなり。
- 一。禪は素より不立文字の教へなり、筆舌を以て之れが眞趣を傳ふるは甚だ難し、況んや其の解し易からしめんことを旨として、努めて専門的難澁の語句を避け、多く平言俗語を交じへ、講話體を以て文を行れるに於いておや、文意の重複また已むを得ざるに出づ。本書によりて僅かに廬山の一面を髣髴し得ば著者の望み則ち足れり。
- 一。禪は消化し難き滋味に似たり。充分に之れを咀嚼玩味せば、其の心身を裨益するの大なる、天下何物か之れに若かむ。然かも過つて生嚼みの儘之れを嚙下せば、忽ち消化機能を破りて、枯木禪、野狐禪の難病に罹らむ、これ最も學者の意を致すべき所なりとす。まづ徐々に之

れを味ひて、而して細心に之れを嚙碎せよ、之れを用ふる其の宜しきを失はざれば、汝が心靈の胃腑は漸く生理的に強健を加へ來らむ。

一。終りに本書に序文を賜りたる大内青巒老師の好意を深謝す。

著者識

禪と修養目次

第一章 緒論

禪學の隆盛……物質的の刺撃……武士道鍛錬の鐵槌……心靈界墮落の兆
……禪の起りし所以……一超直入如來地……禪の短所……上求菩提下化衆
生……趙州無字の消息……大悟徹底の後……枯木禪……禪の妙用

第二章 禪と解脱

宇宙問題についての疑團……一元……二元……無神、一神、多神、凡神、萬有神
……天地併呑、截斷衆流……一心即萬法、萬法即一心……人生と靈の虫……
絶對の自由郷……華嚴の瀧や、淺間の噴火口……人生の間に於けるあら
ゆる束縛……禪の奥義……涌山靈祐禪師警策の銘……味噌は寒中に造る
がよし

第三章 物質的束縛

禪の三不足……生存の第一要件……助力を仰ぐやうでは不徳……有財饑

鬼……失望煩悶等は成功を急ぐより来る……三忘と三不忘……貧を厭すに困る……労働は福壽の根本……金も欲しい、名譽も亦……安積良齊の金儲け法……少欲と知足……趣味……蕪桶と田吾作……業務に戀する……淨裸裸赤洒洒

第四章 精神的束縛

二元

男女相愛の道……佛陀の教訓……心機一轉の法……李伯の詩境……兼好法師の言……精神的束縛を脱する法……心の師となれ……八風に心を動かぬ工夫……莊子の寓言……大鹽中齋の大虚説

第五章 禪より見たる宇宙

四〇

色は空、空は色……哲學說を一團として握り潰した觀案……吾人は空……吾人は實在……全世界即在り……悟道……萬有は無體無相……迷人の生死去來せる相……悟道秘訣の歌……道元禪師大悟の訓……禪偈……虚空を家

第六章 千秋萬古不變の一物

四六

物質の不滅……勢力の恒存……國家の滅亡し時節到來……まさかの時に役に立たなければ……理に契ふし悟りにあらず……テカルトの言……趙

第七章 宇宙萬有の歸趣

六〇

州狗子の佛性……常恒不變の本體……有無を離れなければ不可……禪語由來謎的……真把上人の教訓……空界無象、本來無一物……背後の一人……坐禪の要術……白隱禪師の歌

上天を挂へ下地を壓す……宇宙の根元、人生の極致……世界の始めにして同時に終り……怪の怪、奇の奇……規則定木を以て宇宙人生を律せんとする……群集に入つて一大神秘を悟道する底の眼識……五官の誤り……智識の誤り……宇宙の本體……宇宙の本は百合の花……一莖草は丈六の全身……基督の天國……吾人即宇宙の本體……汝自身を識得せよ……無門關……盤山禪師の語……布袋和尚の歌……溪聲即是廣長舌

第八章 禪より見たる人生

六六

自覺の域に到達した時が宇宙人生の起源……地球と彗星が衝突……解くればもとの野原……空見の外道……印度の一寡婦……宇宙萬有の真理……茶碗……世界の相……肉體と精神……死滅は絶無にあらず……世界の不滅、人の不滅……造物主……放蕩息子と父母……神の干渉を許さぬ……常恒

第九章 人生の目的

不變の因果律……悟道、解脱……我よく宇宙を造る……主観と客観……我れに増減なし……悟道の人……宇宙は大我

……四

問ふ者も愚、答ふる者も愚……理想に向つて奮進……志道軒の話……永富、獨嘯……高議して及ぶべからざるは、卑論の功あるに如かず……山脇東洋……近松半二の戯文……耻といふことはない……笑はるゝも合點……扱その後は死ねるばかりぞ

第十章 偉人たるの修養

……一〇三

煩悶の原因……不平の種……我を擴張する所以……學問が全身……詩人の美化……人格を偉大ならしめやうと思つたら……自己を習ふ……藝術の奥義……忘我……答ふる者は何物……廓然大公……瘦我慢にあらず……芥子と須彌……柏樹になりし僧……牛になりし畫家……會萬物爲己者……荒れ鼠……所作によるものは煩ふ心あり……勢に乗するものは恃む事あり……浩然の氣に似て非……思ふて和をなす者……神武にして殺さず……無我無敵……道は人々の脚踵下

第十一章 膽力の養成

……一〇四

祖元禪師の垂示……精神を常に澄水の如く……才略智謀を恃む勿れ……平生を臨終……勇猛の士氣……心量を擴大にす……時宗の怯懦……怯懦時宗より来る……我に鎌倉男子あり……鈴木正三老人の膽力養成法……家康の二戒……東郷提督

第十二章 見性と安心

……一〇五

兜率和尚の三關……見性悟道の方法……證道歌……見神、見佛……陸象山の心即理說……佛像が金ピカ……人々具足箇々圓成……一休の戀煩ひ……カント……認識の主體……無門和尚の偈……達磨と慧可……祖元禪師の見性

第十三章 靜中の眞機

……一〇六

大活動は必ず大靜止より来る……近所に失火あれば……尋常の風流漢と同一視すべからず……古池や……空界無物の状態……水の音のみを知る……歸家穩坐……婆子燒庵

第十四章 禪と學藝の修養

……一〇七

法華轉轉法華……死學問……學問の束縛……自己を讀む……活學の法……活眼を打開して活書を讀む……不立文字……故紙堆裡の鱈魚……噴滴糟漢……一個の緊隨概

第十五章 禪機と處世……………一五二

實際の秘訣……輕薄之より過ぎたるはなし……事を爲すの秘傳……障子と圖……養子の悟道……舊見を打破せよ、全身を放下せよ

第十六章 禪機の妙用……………一五五

政治家たる資格……一國を呑んで治める……偉大なる考想……人事を見ること蚊虻の如く……始末に困る人……裁群機於世外

第十七章 生死透脫の一路……………一五九

決死の覺悟……いざ死ぬとなれば……山鹿素行の覺悟……日本道徳の根幹……養は泰山より重し……巖頭の感……徒らに死ぬなどは……痛いめに遣はなければ眞實の修行は出來ない……自分の價値を重んずる

第十八章 樂天の眞境……………一六六

諦らめ主義……甚だ高尙な哲理……何事も因縁……依頼心は煩悶の基

……若しや死ななければ……壽夭は我がまゝ……愚なる人は深く物を恐む……顔回も不幸なりき……死期が分つたら大變……諸行無常……現代の青年……眞理は變るものではない……死生は汝の行爲

第十九章 絶對の大自然……………一七三

矛盾撞着……大悟底の境界……七十にして規を踰えず……水と氷……大なる自由を有するもの……苦痛とか煩悶とか……絶對の中の一波一瀾……主觀も客觀も空無……誰れか汝を縛せしや……原因結果の法則……よく樂天に快活に……壽命も汝が自から造る……悠揚浩蕩として……脱落脱落……險夷原不滯胸中……華嚴經……大莊嚴經……羅狀元……悟後の活動……全世界は一大樂園

第二十章 禪の妙趣……………一八六

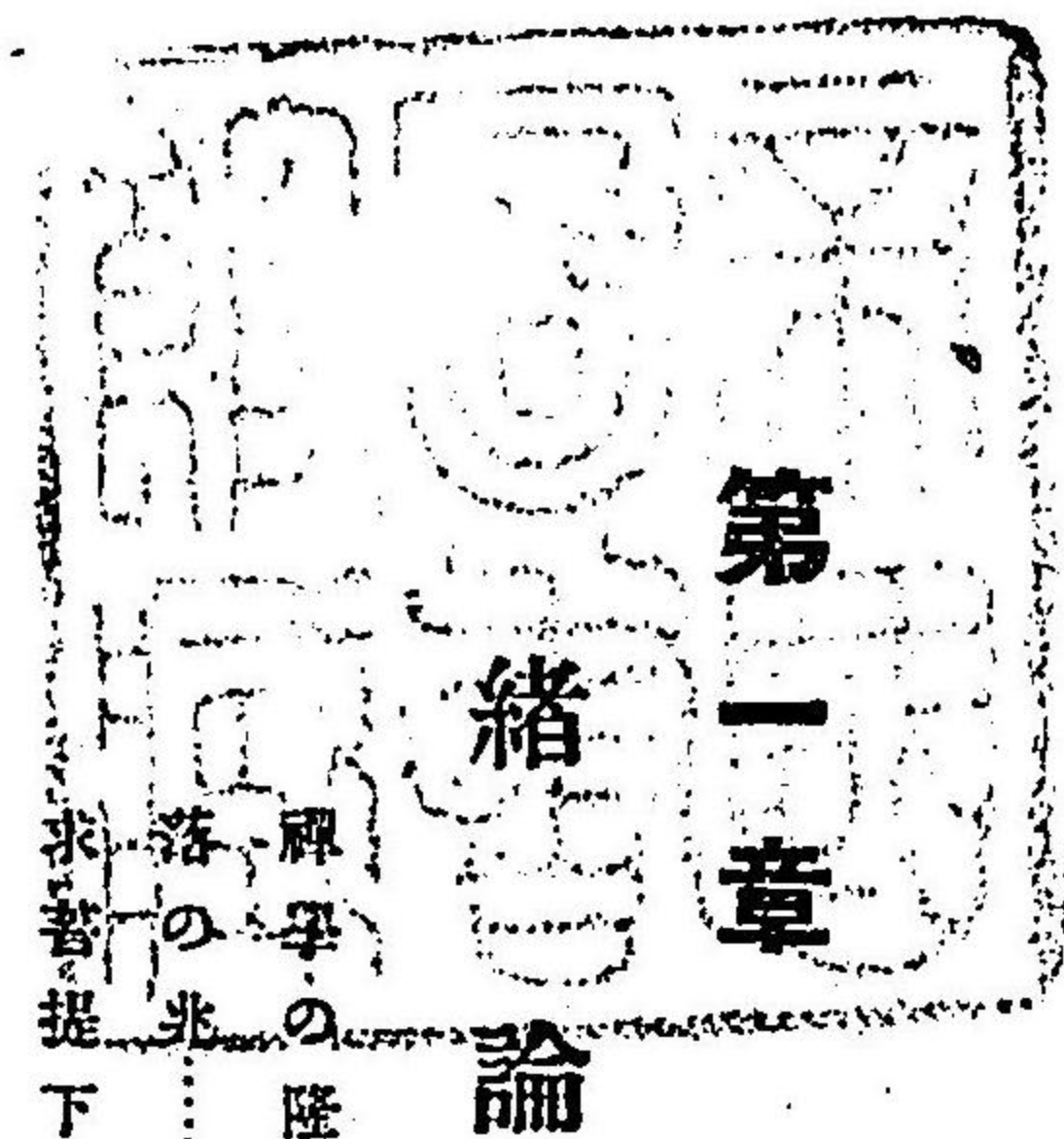
言詮不及意路不到……彼岸に到るの船筏……神通妙用無碍自在……文藝に繪畫に……野狐禪……同胞の心機一轉……衆流を截斷……靈乾坤大地……深遠美妙の詩想……千古不朽の神品……佛法の總府

(目次……終)

本書の表紙畫は漆山天童氏所藏白隠禪師の揮毫に係る初祖達磨の像なり、本書の發行に際し漆山氏の之れが複製を快諾せられたるは著者及び發行者の厚く謝する所なり。

禪と修養

釋 悟 庵 著



禪の隆盛……物質的の刺撃……武士道鍛錬の鐵槌……心靈界墮落の兆……禪の起りし所以……一超直入如來地……禪の短所……上
求者提下化衆生……趙州無字の消息……大悟徹底の後……枯木禪
……禪の妙用

近頃禪學の盛んなること實に旭日昇天の勢である。これ如何なる思想の影響であらうか、然してこの思想は日清戰役より日露戰爭の後に至つて最も著しき現象を呈し來つたやうに思はれる。若しこの觀察をして誤り

なからしめたことならば、禪學の隆盛は戰勝後社會各方面の發展と共に國民が要求し來られる自然の聲であるといふても敢て過言ではないと思ふ。开は外でもない、斯る大勝を得たのは 大元帥陛下のいとも畏こき御威稜の致す所なるは勿論であるが、又從來禪と武士道との間に密接の關係があつて、よく我邦武士道の精神を修養せし結果であるといふことが、或る部分に知らるゝと同時に、積極的方面に於ける禪の價値をも認めらるゝに至つたからであらう。而して又一方には戰勝國民が社會に對する任務が重くなると同時に、其の外界物質的の刺撃が日に益々劇しさを加へ、隨て其の精神に疲勞を來し、甚しきは煩悶、懊惱を重ねた結果遂に其生命を屠するものあるに至つたのである。是に於て、禪は精神的武士道鍛鍊の鐵槌として、煩悶懊惱を掃蕩するのを玉箒として一般の人々からも要求せらるゝに至つたのであらう。

然るに或者は言ふ、禪學や王學の盛んなるは、心靈界墮落の兆であると、

可惜好漢事を解せずで、斯くの如きとをいふものは、未だ禪の何たる、心靈の何たるかを知らざる短見者流であるといはねばならぬ。

見よ最初禪は如何にして興起せしか、又如何なる必要ありて唱道せられしかを、其の支那にまれ、日本にまれ、禪の起りし所以は從來の佛者が徒らに教相判釋に汲々として皆文字の奴隸となり、其の根幹を忘れて枝葉を採摘し、遂に煩瑣病に罹つて自己本具の心靈を暗昧にし去る者多きを救濟せんとして起つたものではないか。初祖達磨大師がいふてある、

從上の諸佛は唯心を以て心に傳へたるものなり、此の心を除くのほか

に、更に別佛なし

と。乃ち直指人心、見性成佛てふ旗幟を標榜して初めて支那に此の禪風を鼓吹したのではないか。これ枝葉を捨て、本幹に達せしめ、煩瑣なる小岐路を辿らしめずして、一超直人如來地てふ大道を濶歩せしむるの正法である。換言すれば、心靈界の墮落を救濟する必要から起つたのであ

る。故に禪を稱して佛心宗といふ、佛心宗の隆盛を以て心靈界墮落の兆だなど、は誤れるの甚しきものではないか。

又或者は言ふ、禪學の短所を言へば其の活動なき懶惰の點にあるのだと、是れ亦其の一を知つて未だ其の二を知らざる擔板漢である、彼れはたゞ禪の消極的靜止的の方面、否、寧ろ一の禪病を認めて斯る妄評を下した者である。又彼れは言ふ、禪學は心學にして主として自性の鍛鍊に汲々たるを以て其心を他人の救済に用ふること能はず、且つ禪學の教理も亦慈悲善根を積むを以て無功德とすればなりと、これ何たる盲評であらう。如何にも自性徹見は修禪の要ではあるが、其の自性徹見の目的は何にあるかと云はゞ上求菩提、下化衆生を措いて他にないのである。されば如何に自性鍛鍊に汲々たればとて衆生濟度が出来ぬと云ふ理はない。鍛鍊しつゝ衆生を度するのである、道元禪師は、斯う云ふてゐる、

凡そ菩提心を發するといふは、己れ未だ度らざる先きに一切衆生を度

さんと發願し營むべし

と。これを経には自未得度、先度他とある。之れを本證妙修とも云ひ向上しては修證不二と云ふのである。殊に禪は實踐主義である。口を以て衆生を教化するのではない、身を以て衆生を濟度するのである、何を以て禪は不活動である懶惰者であると言ふか、且つ甚だしきに至つては、慈悲善根を積むを以て無功德であるとするのが禪の教理だと斷言する者がある。實に暴言といはねばならぬ。これ彼の梁武帝と達磨との問答を其文字のみを讀んだ誤で、所謂文字の奴隸である、文字を離れては何も言はれぬ瞎・瞠・漢である。斯る者は未だ達磨の無功德、趙州無字の消息が會せる筈がない。其味ひを會せずして彼れ此れ喋々とするのは、恰かも下戸にして酒の佳否を評するやうなものだ、苟くも禪の門閭にも達せず、少くも禪味を咀嚼するの能力なきものが到底禪の長短を彼此評するの資格がない、假りにも兎や角言はうとならば、宜しく正師家の爐鞴に入つ

て其の鐵槌下に打たれなければ駄目だ。
 禪には消極的靜止的方面があると共に積極的活動的方面もあることを知らなければならぬ。否其の消極的靜止的は寧ろ修養時に屬するので、即ち自修時代である。大悟徹底の後は大に活動せなければならぬ。之れを大死一番して大活現成せよといふのである。又向上向下百自由とはこの消息を云ふのである。然るに世人多くはこの自修時代の靜止的即ち靜坐觀察して枯木死灰の如くなるを見て不活動である、懶惰であるといふのであらうが、これ枯木禪は一の禪病であることを知らぬからである。彼の枯木寒巖に倚て三冬暖氣なしといふて、一婆子の爲めに居室を焼かれて放逐された公案があるから、此輩はよろしくかゝる公案にでも參して見るがよからう。

然し由來多くの禪僧は兎角この枯木禪に陥りやすく、其の云爲動作も亦多く出世間的に偏したがるが故に、間々古徳の祖録公案を提唱するにも

矢張り世間離れた天馬架空的の歌法螺に過ぎないやうに思はるゝ爲め、遂にかゝる批評を下されたのであらう。これ世の罪ではない、畢竟弘道者の罪過である。干茲今吾人の専ら説かんとするのは、其活動的方面に向つて禪の妙用を發揮し其の活機輪を轉じやうとするのであるから、讀者も亦其心して見て貰はねばならぬのである。

驢馬珊瑚鞭。

驅馳洛陽道。

自矜美少年。

不信有衰老。

白髮會應生。

紅顏豈長保。

但看北邙山。

箇是蓬萊島。

紅顏豈長保。

食人好美財。
 財多還害己。
 無財亦無禍。

恰如桑愛子。
 散之即福生。
 鼓翼青雲裡。

于大而食母。
 聚之即禍起。

(寒山詩)

第二章

禪と解脱

宇宙問題についての疑團……一元……二元……無神、一神、多神、凡神、
萬有神……天地併呑、截斷衆流……一心即萬法、萬法即一心……人生
と靈の虫……絶對の自由郷……華嚴の泥や、淺間の噴火口……人生
の間に於けるあらゆる束縛……禪の奥義……湯山靈祐禪師警策
の銘……味噌は寒中に造るがよし

古來東西の思想家はこの宇宙の現象に疑團を抱き。進んでは人生問題に就いて其の歸趣を知らうとして。或は哲學に、宗教に、科學に之を探究討尋して、一は宇宙の本體を一元に歸せんとし、他は二元を正しとし。甲は人生の目的を快樂であるといへば、乙は嚴肅的克己を唱道する、或は世界は神の造りたるものであるといへば、他に之を唯心造なりと主張するあり。無神、一神、多神、凡神、萬有神と、甲論乙駁、殆んど底止

する所なく、紛々擾々、今になほ不可解の問題として、一部の神經質のものをして煩悶懊惱せしむるのである。斯く幾千年の間幾多の思想家が寄つてたかつて頭を悩ましたのであるが、到底宇宙は舊に依つて茫茫蕩蕩である。人生の問題は舊に依つて朦朧漠々たりだ。茲に於てか天地併呑、截斷衆流的活ける宗教が起つて來た、これ即ち禪である。この禪や印度に起りて支那に播き、殊に支那宋代より元、明の間に於ける思想界をして殆んど禪化せしめ。上下三千歳の歴史を有せし彼の思想界に一大變化を與へたのである、而して日本に來つてはこの直覺的なる快活機敏の思潮精神と調和して萬國無比の武士道の根幹を扶植し、益々發展せしめ大成せしめた譯であるのだ。

そこで、然らば禪の目的は何處にありやといはゞ、开は言ふまでもなく悟道にある、解脱にある。解脱とは何ぞや、

三界唯一心 心外無別法

で。即ち心生するから萬法がある、心生しなければ萬法ともに休息する、一心即萬法、萬法即一心と解するのが佛教の極致である。而して心境俱に融通して無碍自在なるを解脱と云ひ、悟道といふ。つまり此の世界は吾人が作り出すものであると徹見するのである。碧巖集に云ふ

盡乾坤大地 是箇解脱門
と。又無門關に云ふ

大道無門 千差有路
透得此關 乾坤獨步

とは。これ禪宗解脱の當體である。

が蓋し人は蠶の虫の如き者であつて、自身から絲を出して自身を纏綿し、而して終には自身の自由を失つてしまふ。しかしこれが所謂大死底に入つたのである、若し生氣あり、活機あるものは、心機一轉して蛾となる、是れ大活現成底である。人もまたさうである。自ら種々の世界を造り、

宇宙を作つて、其の世界の爲め、其の宇宙の爲めに束縛せらるゝので、語に自縛自縛とはこれである。

是に於て大活機あるもの、即ち透網底の金鱗ならば、此の細網を脱し此の繫縛を截断するのである。されば其の束縛を脱するには如何したらよからう、これが即ち解脱を求め悟道を期するのである。解脱と云ひ悟道と云ふのは人生の束縛を脱して大自由大安樂の神域に遊ぶのである、即ち絶對の理想境、絶對の自由郷に悠遊するのである。プラトンの理想國、佛の涅槃、基督の樂園、等は皆これである。人誰れか此の境地を欣求せざらんやだ。が、しかし、求めやうしても、なか／＼さう容易に得られべきものではない。先づ第一にわが身を捨てねばならぬ。身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれといふてあるが。あまり其の身に執着すると益々束縛せられ、深水に陥つて仕舞ふのである。さればといふて吾人が身を捨てるといふのは決して彼の華嚴の瀧や、淺間の噴火口や、將た又鐵道線路に

身を投じよといふのではない。老子が『吾に大患あり、吾が身あるが爲めなり』と云ふが如き厭世思想を鼓吹するものでもない。吾人の身を捨てよとは、つまり積極的にこの宇宙の間、人生の間に於けるあらゆる束縛と奮闘し、不惜身命に努力して其の羈絆を脱離せよと云ふのである。道元禪師はこれを身心脱落と云ふてゐる。大燈國師の詩に、

一回透過雲關了。南北東西活路通。

夕處朝遊沒賓主。脚頭脚尾起清風。

とある境地である。然し

夫れ業繫身を受け、未だ形累を免れず、

父母の遺體を禀て、衆縁を假て共に成す。

と。滄山の靈祐禪師の言はれたやうに、宇宙の間に於て何物か能く何等の束縛をも受けざる物があらうや。遠くは無機物、有機物、及び動物植物。國家社會を始め、近くは萬物の靈長と自ら誇れる人類までが一とし

て束縛を受けざるものはない。中に就いて吾人々類を最も甚だしとするのである。先づ母の胎内を出づるや既に自然に束縛せられ、社會に束縛せられ。父母に束縛せられ、長じては長上に束縛せられて凡そわが周圍のありとあらゆる一切の事々物々に束縛せられざるものは一もない。而して其の深くして、尤も固く束縛するものは、自己が心意の束縛である。即ち慾望、虚榮心、愛情等凡そ五官に觸れて衝發する所のもの皆自己を束縛せざるはなしで、人は暗より來りて暗に歸るといふ語があるが、予を以て言はしむれば束縛から來りて束縛に了るといふてよからうと思ふ。』

禪はこの葛藤を截斷する利劍である。この束縛を截斷するの快刀である。即ち天地を吞却し。宇宙に逍遙悠遊するの活人を打出するのである。這箇の當體、這箇の消息が即ち悟道である、解脱である。而して此悟道や解脱や他によつて求むべきものではない、餘人所不見だ。唯與佛乃能究盡だ。古人は之れを水を飲んで冷暖自知するが如しと云ひ、例へば未

だ砂糖の味を知らぬものに向つて、砂糖の味はかくく、なりと千言萬語を費しても會得させる譯にはゆかぬ、只汝自ら試みに一嘗めして見よといふより外詮術ないのと同様である。されど茲に只修養法の参考として左の數語を掲げて置かう。

嵩山靈祐禪師警策の銘に云はく

幻身夢宅は空中の物色、前際窮ることなく後際寧ろ尅せんや。此に出で、彼に没して、升沈疲極す。未だ三輪を免れず、何れの時か休息せん。世間を貪戀して、陰縁質を成す。生より老に至るまで、一も所得なし。根本の無明茲に因て惑さる。光陰惜むべし刹那も測られず。今生空しく過くせば來世窒塞す。迷より迷を積れば皆六賊に因れり。六道に往還し三界に徧徇す。早く明師を訪ひ、高德に親近し。身心を決定して、其の荆棘を去るべし。世は自ら浮虚なり衆縁豈に通らんや。法理を研究して悟を以て則と爲し。心境俱に捐して、記する莫れ憶す

る莫れ。六根怡然として行住寂黙。一心生せざれば萬法俱に息むと。又こゝに面白き禪話がある、洞家の偉僧として知られた乞食桃水和尚と、京の角倉主人との問答がある。或時角倉主人が桃水和尚の道風を慕ひ、五條橋下の乞食群より桃水和尚を請して悟道の要義、即ち禪宗のおさとりとは如何なるものぞと問ふた、和尚直ちに天井を眺めてカラカラと打ち笑ひ、禪のおさとりとて左様六ヶしきものにはあらず。要は味、噲は寒中に造るがよし、酢は土用中に醸すがよからうと答へたとある。彼れ角倉果して此の言下に省悟したかドウか、後の參禪者は道は遠きにあらざるを知つて日用行中に如何くと工夫したらばよからう。

題茶釜

(一休和尚)

石口不言全體圓カチリ

不離色相絶諸絲カチリ

併吞大海江河水

吐出趙州一味禪

第三章 物質的束縛

禪の三不足……生存の第一要件……助力を仰ぐやうでは不徳……
有財餓鬼……失望煩悶等は成功を急ぐより来る……三忘と三
不忘……貧を隠すに困る……労働は福壽の根本……金も欲しい、名
譽も亦……安積良壽の金儲け法……少欲と知足……趣味……糞桶と
田吾作……業務に燃する……淨裸裸赤洒洒

物質的束縛とは何であるか。人も亦一種の動物である。肉體はドウしても自然の制裁外に脱することは出来ぬ。第一に飲食物なくしては生存することが出来ぬ、衣服家屋がなくては雨露を凌ぎ、寒暑を防ぐことが出来ぬ。禪に三不足と云ふことがある。衣不足、食不足、睡眠不足、これであるが。勿論、動物としては種族の繁殖を餘儀なくし、妻子を養ひ、眷族を保たなければならぬし。殊に吾人は社會の一員として生活しなければ

ばならない。社會は適者生存、弱肉強食の法則に仕配されて居る。人は決して孤立を許されぬ限りは、社會に對する一定の義務を果さなければならぬ。
そこで先づ社會に生存する第一の要件といへば、生活し得らるゝ丈の金錢を所持すべきことである。金錢は無論絶對的の價値を有するものではないけれど、吾人の生活上一日もなくては叶はぬものである。彼のトルイストですら、貨財は一種の勢力であると謂つてゐるではないか。されば猥りに米人を笑ふてはならぬ。或意味に於いて、人は經濟上に於いてのみ生存の權利を有すと見ても差支へない。經濟を大切にするのは一種の道徳である。古訓に衣食足つて禮節を知るとあるのは至言といはねばならぬ。假令君子じや、聖人じやと云はれたとて、人に迷惑をかけて、助力を仰ぐやうでは不徳と言はざるを得ぬ。されば若し夫れ物質的の束縛を脱し、人生の解脱を得やうとならば、第一に此の點に於て解脱しな

ければならぬのだ。吾れは悟道したと云ふても衣食に困窮し。毎日パンの爲めに汲々して他人の同情を求むるやうでは眞に悟道したとはいはれない。されば如何にして解脱し、如何にして悟道し得らるか、他なし先づ一通り生活し得らるゝだけの資財を造ること、これが肝要である。さればといふて、或る守銭奴の如く握つたものは厘毛も離さず、出すことは袖から手を出すことも厭やと云ふやうなケチン坊になれといふわけではない、彼等は金錢に執着し、金錢の奴隸となり、一生解脱することが出来ぬので、眞に憐むべきものだ。佛陀はこれを有財餓鬼と呵責してある、されど金錢を得ず、生活の道に窮し、表面には金錢を賤しむ、内心には之に戀々たるが如きものも、固より解脱することが出来ないし。また生活難を訴へてゐるやうでも到底人生問題、否、悟道や解脱を云々する資格がないのであるから、何はサテオキ先づ早く生活上の問題を解脱することを勧める。

其の性行に就いては兎角の批評を免れぬけれど、能く大金を贏ち得て、一代にして成功せし大倉喜八郎の談に云ふ。

常に愉快なる精神を以て前進せんとせば、第一、眞の成功は甚だ遅々たるものなることを覺悟せざるべからず。失望、煩悶等は畢竟成功を急ぐより來れるものとす。第二、社會にまれ、個人にまれ、進歩なるものは、波浪の如きのみ、一高一低は常なり。喜ぶに足らず、憂ふるに足らず。第三、何事も自ら是なりと信ずる所を斷行するにあり。人の多く心を痛むるものは、他の毀譽褒貶を顧慮するに由る。これ恰かも晴天ならずば旅する能はずといふものと、何の相異かあらん。かくては終に一生安んじて事を爲す機會なかるべし。第四、事大小となく陰險なる手段を弄せざるにあり。陰險なる手段は成ると成らざるとに拘らず、心常に安んぜず、猶曇天に雨具の準備なくして旅するが如し。第五、良心の命に従つて進行すべきなり。良心だに己が味方ならば、

天下皆敵となるとも泰然たるべし。

と。もし其の人を以て其の言を退けることが無ければ、此の語の如きは充分味ふべき価値があらう。

或は言ふ、貨財を儲くるに秘訣がある、其れは三忘と三不忘とである。

三忘は

我れを忘れ、

人を忘れ、

時を忘る、

と、これである。

三不忘とは

道を忘れず、

命を忘れず、

智を忘れず、

と、これである。若し人、この三忘、三不忘、を日々拳々服膺して居つたならば必ず社會に於いて衣食に窮するが如きことはないであらう。人は往々貧に困らずして、貧を隠すに困る。これは人が虚榮の動物であるなさけなさだ。されど苟くも人生を解脱しやうと思へば、決して虚榮を張つてはならぬ。努めて無我になり、人の毀譽に關らず、時の如何によらず、己が生存の第一要件の爲めには、大に働かなければならない。懶惰にして安逸を好んでのみ居つたならば、身體は益々虚弱になる、生活も自然不如意になる。之れが爲めには心をも悩まし、小事に齷齪し、世をはかなきものに思ひ做して、解脱の如きは思ひもよらぬことになる。假令富裕な者でも、一定の労働は有益で、且つ人生の義務である。彼の養生家を以て聞へたる貝原益軒は云つてゐる。

身體は日々少しづつ、労働すべし、久しく安坐すべからず。毎日飯後に庭園の内數百足しづかに歩行すべし。云々

と。勞働は富を得、長壽を得るの根本たることを忘れてはならぬ。人生の解脱を得やうとするには、先づ第一に此の物質的缺乏の束縛から脱出せなければならぬのだ。近時人口は日に繁殖し、生活の困難は一日増しに劇甚となつた。されば今日の老若男女、孰れも生活の道に追はれぬものはなく、古のやうに悠長なる生活をなし、寛宥溫柔なる人物を出すことは難い、顔色は常に物足らぬやうに顰み、思想も自らせよこましいものばかりだ。蓋し人は二人の主^しに仕ふることが出来ない譯で、即ち仁に仕へやうとすれば利に疎になり、利に仕へやうとすれば仁に疎になる。俗語に『此町立れば彼の町が立たぬ、兩方立れば身が立たぬ』とあるが、今日の青年男女は或は斯る立場にあつて煩悶して居るではなからうか、金も欲しい、名譽も亦、といふに至つては、益々煩悶病の犠牲とならざるを得ぬ。

或人が安積良齋に金儲けの方法を問ふた、良齋が云ふには、『宜しく片足

を揚げて尿せよ』と、其の人が『斯くては狗に類せずや』と云ふと、良齋曰はく、『苟くも金儲をせんと欲せば、人間にては不可なり』と。此の言稍々極端に走るの嫌ひはあるが一分の眞理は慥かにある。宜しく味ふべき言である。されど吾人は敢て道義を顧みざれとは言はぬ。只己れが虚榮を捨て、不惜身命に、能く己れに克ち、小我の羈絆を擺脫して大我と一致し活潑に働けと言ふのである。既に充分この物質的缺乏をして満足せしめたときが、先づ此の束縛を脱し得たと言つてもよい。飢えたる時、腹膨るゝまで喰へば、即ち餓餓てふ苦痛を去るやうなものだ。要するに物質的の缺乏を感じたならば、大いに儲けて其の缺乏を充足せよと云ふのだ。しかしながら棚から牡丹餅の落ちて来る筈はないから、大いに働いて自分の手を以て取れと云ふのだ。これでこそ積極的、進取的、青年的といふべしである。されど吾人は敢て消極的、退守的、老年的方法を無下に排斥するものではない。人の境遇は千差である、人の性

能も萬別である。己れに應ずる方法を取らば則ち可なりだが、しかしこの消極的方法は極めて單純ではあるけれど、又極めて實行し難い點がある。开は何かと云へば、少欲と知足これで、佛遺教經に教へて言ふ。多欲の人は利を求むること多きが故に苦惱も亦多し。小欲の人は求むることなく、欲することなければ則ち此の患なし。たゞに少欲すら尙ほ修習すべし。ことに況んや少欲は能く諸の功德を生ずるをや。少欲の人は詔曲して以て人の意を求むることなし、亦復諸根の爲めにひかれず。少欲を行するものは心則ち坦然として憂畏する所なし、事に觸れて餘りあり、常に足らざることなし

と。これ少欲の功德を示したるもの。次に知足について云ふ。

知足の法は即ち是れ富樂安穩の處なり。知足の人は地上に臥すと雖も猶ほ安樂なりとす。知足のものは天堂は處ると雖も亦意に稱はず。不知足のもの富りと雖も而かも貧し、知足の人は貧しと雖も而かも

富めり。不知足ものは常に五欲の爲めにひかれて知足のものゝために憐憫せらる

と。是れもろくの苦惱、煩悶を脱するの法として誨へたのである。

昔しギリシヤの哲學者にも此れに似よつた話があつた。其は彼の有名なるエピクテタスと、或る雄辯の聞えある政治家との問答である。即ち雄辯なる政治家が、或日エピクテタスを訪うて學ぶ所あらんとした、エピクテタスは冷眼以て彼れを迎へて而して言ふには、

足下は學ばんが爲めに來りしか、評せんが爲に來りしか
と。雄辯家は

然り、若し予にして夫子に學ばんか、夫子の如く、一皿、一器、はた
尺寸の土地をも有せざる貧人となるべし

といふた、エピクテタスはそこで、

吾れは斯の如き物を欲せず、且つ足下は吾れよりも貧し、保護者の有

無、吾れ何ぞ關せん。足下は一に其れが爲に憂心沖々たり。吾れは足下より富めり、吾れ王と雖も、何かせん、吾れ諂ふ所なし。是れ吾れの所有品の、足下の所有品なる、金銀皿器と異なる所以なり。足下は金銀の皿器を所有するも、土器の如き劣欲の心を有するのみ、而して吾れの心は吾れの王國なり。足下の心繁忙にして身懶惰なるに反して、吾れには多くの幸福なる動作を供す。渾て足下の所有品は足下には不足と見ゆるも、吾れには吾れに大なるものに見ゆ。足下の欲望は不満なり。吾れは即ち満足なり。

と喝破した。見よ解脱底の達人は其の人生に處する淡々如たり、泊々如たること東西の聖賢皆一軌であることを。

人は往々にして理外の理に支配せらる。此の理外の理を悟するものにして、始めて人生の眞趣に體達し得らるるのである。斯の如きものは、之れ「趣味」に非ずや。人にして趣味を解せば、時として如何なる苦役

をも楽しんで之れに従ふことを得らるるのである。

趣味を有せざる仕事は、如何に高尚な種類に屬するものでも、何人も手を着くことを厭ふ。趣味は實に吾人の精神と肉體との楔子ともいふべきものである。田植を描ける畫を見て農業に志した貴族もある。又河水に悠々と舟を漕ぐのを見て、坐ろに船頭戀しと走つた少女がある。昔し或畫家が我が家の火災に遇つて焰々たる猛火に焼け落つるのを見て大に趣味を感じ、不動明王の火焰裡に立つ姿を描いたといふ逸話がある。彼の糞桶を擔へる田吾作は彼の糞汁に付て餘人所不見の趣味を有すと云つてもよい。趣味は偶然の間に湧起して能く人をして心機一轉せしむる力がある。心機一轉は趣味を新に發生せしむる所以だ。暴風の音に天樂を觀じ曠野の間に美花を見る。詩人は宇宙間何物に就いても、皆趣味を感じるのである。雨の降るにつけ、風の吹くにつけ。一塵一芥、何物として趣味ならざるはない。彼れ香殿が擊竹の音を聞て悟つたのも、靈雲が

桃花を見て悟つたと云ふのも皆この趣味を了したのだ。人は其の業務に戀するが如くにして始めて趣味を覺えるのだ。これ豈我を忘れたる状態ではなからうか。人間衣食に困しむ間は、形而上的疑惑の如きものは到底起るの餘地がない。されば衣食の道充分に備はれば最早一通りの安樂を得らるゝ譯である、愉快を得らるゝ筈である、禪では此の境界を淨裸、赤洒洒と云ひ、或は清風明月とも形容するのである。禪偈に

心鏡明鑑無礙壁、廓然瑩徹周沙界、
萬象森羅影現中、一顆圓光非内外、

と、これ外界物質的の繫縛を脱して、心胸廓落たる境界を賦したのである。

第四章

精神的束縛

男女相愛の道……佛陀の教訓……心機一轉の法……李伯の詩境……
兼好法師の言……精神的束縛を脱する法……心の師となれ……
八風に心を動かさぬ工夫……莊子の寓言……大鹽中齋の大虚説

精神的束縛とは何であるか。情慾のやうなものは無論精神的束縛に屬してもよい、男女相愛の道は、勿論自然に、本能的に發動するものであるけれども、人は一方に動物であると共に、一方に神である。だから自然にのみ支配せられないで能く自然を支配し行くことを得るのである。人は本能に盲従することの害悪を知るから、茲に節制の法を發見し、大勇猛心を以て之れを制御しやうとするのである。『武士は喰はねど高楊子』といふやうなことは其思想の發現である。

蓋し情慾は、他の慾望やら、功名心のやうなものや、又は羞恥心のやうな精神作用に比して、特に強い永續的の力を有せぬ。情慾は一時的の發作である。學問又は他の事業に心を置め、理性の光が明らかである時は、決して湧起する餘地はない、只爲すともなく事物に疎懶なるとき、又は一定の業務にとりつかずに、安閑無事に氣の弛んで居るときなどは多く情慾が湧出するのである。所謂小人閑居して不善をなすと云ふたのはこゝらの道理である。然るに若し能く心機一轉、眼を大局に注ぐときは、かゝる情慾は煙散霧消し、此等の煩惱妄想は自ら脱落してしまふのである。佛陀教へて、

夫れ道をおさむる者は、猶ほ木の水に在て、流に従つて行くが如し、兩岸に觸れず、人の爲に取られず、鬼神の爲に遮られず、洄流の爲に住められず、亦腐敗せず。吾れ此の木、決定して海に入らんことを保す。學道の人も情慾の爲に惑はされず、衆邪の爲に燒まれず、無爲に

精進せば、吾れ此人必ず道を得べきことを保すと。
又曰はく、

欲は汝が意より生ず、

意は思想より生ず、

欲意各々起さば、

色にあらず、亦行にあらず、

と古人は、

道に進み、身を嚴にして、

衣食住足らざるも、思へ、

日往き月來ぬれば、

颯然として白首、

と云ふて居る。これ等の語、固より根柢深き情慾の束縛を脱するには足らざるも、たゞ能く趣味の轉換を試みて實行したならば、また少しく益

があるであらう。殊に思ふまいとすれば益々思ひ浮び、悲しむまいと思へば益々悲しむのが凡人の常情であるから、かゝる時には決して其の湧き来る思想を壓抑しやうとしても無益である。唯だ努めて心機一轉するより外はない。即ち思想を他に轉することを勉むるのである。既に起つた煩悶、苦惱の如き、又は散亂妄動の如きは、固よりこの心機一轉の外はない。即ち漸く進めば能く無念無想の境に入つて、彼の李白の如く、宴座寂として動せず、

大千毫髮に入る、

てふ詩趣を味ひ得るに至るであらう。

凡そ一生の間に通じての大目的を立て、而して其の意識を益々強度に高め、愈々向上せしめ、其の他を努めて忘却するのも、亦一方法である。兼好法師の言に、

若き程は諸事につけて、身を立て、大なる道をも成し、能をもつき、

學問をもせんと、行末久しくあります事ども、心にはかけながら、世を長閑に思ひて打ち怠りつゝ、先づ差し當りたる目の前の事にのみ紛れて、月日を送れば、事々に爲すこと無くて身は老ひぬ。終に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取り返さるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へゆく。されば一生の内、旨とあらまほしからんことの中に、何れか勝ると、能く思ひ較べて、第一の事を案じ定めて、其の外は思ひ捨て、一事を勵むべし。一日の中、一時の中にも、數多の事の來らん中に、少しも益の勝らん事を營みて、其外をば打ち捨て、大事を急ぐべき也。何方をも捨て心に取り持ちては、一事も成るべからず。乃至、京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行き着きたりとも、西山に行きて、其益勝るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべき也。此處まで來着きぬれば、此の事をば先づ言ひてん。日を指さぬことなれば、西山の

事は歸りて、亦こそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠則ち一生の懈怠となる。之れを恐るべし。一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るゝをも痛むべからず。人の嘲りをも耻づべからず。萬事に代へずしては、一の大事成るべからず。云云

と。これ實によい教訓ではないか。裡諺に『八細工庭に年とる』との意を能く道破し盡して居る。

語を換へて言へば、己が精神に束縛せられぬ方法は、心が外境に向つて動かざるやう勉むるにある。この事は此書一篇の殆んど眼目とも云ふ位であるから以下の諸章に詳論するが、大略を言へば

己が心を、己れより解脱するなり。

と。彼の超世脱俗と云ひ、豁然大悟と云ふも、要するに己れが心を師とせず、心の師となつたのである。心に轉せられず、心を轉するのである。心を動かさぬといふことに就いては、先哲にも種々の説があるが。要は

心はなきものなり、

なきものに何迷うらん。(公案)

八風吹けども動せず、

天邊の月、(禪定)

で、禪定にあつて八風に心を動かさぬ工夫をなすがよからう。八風とは、利益、衰頹、誹毀、榮譽、稱賛、饑餓、苦痛、快樂、

と八つである。之れを約すれば順境と逆境とだ。順境に處して動かざるものはあらう、逆境に處して能く天邊の月の如くなるものは至つて少ない。

莊周は古來巧みに寓言を述べたものと稱せられるが、しかし割合に人が之を解せぬ、所謂一種の詭辯家、異端説と見做されて居る。されど次の寓言などは吾人は大に趣味ある話説として感じてゐるのである。即ち徳

充符と云ふものに、

衛の國に哀駘宅といへるものあり、極めて醜くき男なりしにも拘はらず。男子として彼と一たび交るや、何となく別るゝ能はざる思ひあり。婦人にして彼を見るや、他の妻たる能はざるまでも、せめて彼の妻とならんことを冀ふもの幾十人。彼れは物を語るに、自から言ひ出すことなく、多くは人の言葉につきて和するのみ。人に君たるの才なく、人を教ふるの力なく、財祿の人に與ふるものなし、但だ彼れの特色はたゞその醜貌のみなりき。魯の哀公之れを聞き、必ず人に異なるものあらんとて遂に之れを召す。公期年ならずして之れを重用し、宰相の位を與へたれども喜ぶ色もなく、王國をも彼れに譲れども、心に留めざるが如し。間もなく彼れ國を捨て去る。哀公快々として樂まず、恰かも愛妻を失ひしが如く、彼の後を慕ひ行きたき心地なり。由て孔子に問ふ、彼れは何人ぞや。孔子曰はく、彼れは全徳の人なり。彼れ

は未だ言はずして信せられ、功なくして親まれ、人をして己が國を授けて、たゞ其の受けざらむことを恐れしむ。是れ必ず、才全ふして徳形はれざる者なり。哀公曰はく、何をか才全しと謂ふ。孔子曰はく、死生存亡、窮達貧富、賢と不肖と、毀譽と、饑渴寒暑とこれ事物の變化にして命運の流行なり。日夜眼前に相代つて、人知も其所以を知る能はず。故に吾が心の和をみだすに足らず、吾が靈符に入らず、吾が徳の和豫は常に春風を以て之を待ち、心中常に愉悅を失はず。これ心中に萬物四時の融々として流行するあればなり。哀公曰はく、何をか徳形はれずといふ。孔子曰はく、水の平なるは、内之を保ち、外之れを蕩たふさればなり。徳は成和の修なり。徳形はれざるは、蘊蓄うんそく韬光、自ら人をして傍を離るゝ能はざらしむるなり

と。これ固より寓言には過ぎぬのであるが、毫も外物の爲めに心の平和を害せず。能く自ら内に修むる所ありて、所謂八風吹けども動せざるに

似たりだ。斯くの如くにしたならば夫れ何物か來つて吾を束縛すること
があらうや。

又兼好法師は

若きときは血氣内にあまり、心、物に動きて情欲多し、身を危ぶめて
碎け易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、之
れを捨て、苦の袂に寝れ、勇める心盛にして物と争ひ、心に耻ぢ羨み、
好む所日々に定らず、色に耽り情に愛で、行を潔くして百年の身を誤
まり、命を失へる例し願はしく、身の全く久しからんことを思はず、
好ける方に心引きて、長き世語りともなる、身を過まつとは若き時の
所爲なり。老いぬる人は精神衰へ、淡くおろそかにして感じ動く所な
し。心自ら閑かなれば無益の業をなさず、身を助けて愁なく、人の煩
ひ無からんことを思ふ。老ひて智の若き時に勝れること、若くして形
の老ひたるに優れるが如し

といふてゐる。禪には

脚下を照願せよ、足實地を踏み來れ

と。蓋しこれ細節に涉りて誤りなきは悟道の一步なりといふてよい。も
し夫れ豁然として大悟一番、徹上徹下、乾坤打破底の活機輪を轉じやう
と欲するには、即ち禪に依る外はないのだが、聊か其れに近きものに大
鹽中齋の言つたことがある。

功名富貴は錦にて覆へる陷阱なり。心虚なれば則ち能く見て以て之を
避く。虚ならざれば則ち視て見えず。蹈んで死する者少ならず。嗚
呼、虚なるかな、虚なるかな

と。中齋が大虚説の數句に過ぎぬけれど、能く盡したりといふてもよか
らう。聊か禪味を含んで居る。

第五章

禪より觀たる宇宙

色は空、空は色……哲學說を一團として握り潰した鐵案……吾人は空……吾人は實在……全世界即在り……悟道……萬有は無體無相……迷人の生死去來せる相……悟道秘訣の歌……道元禪師大悟の訓……禪偈……虚空を家

宇宙とは何であるか。吾人の宇宙に對する説明は極めて簡單である。曰はく、

色である。

空である。

色は空である。

空は色である。

其の解釋に云ふ

色は、色相形質、即ち物質である。

空は眞心淨明の稱である。又空は不染の義。去來無きの義。觸處に現するの義。

と、斯の如くにして、古來の唯心論、唯物論、二元論、一元論、抽象的一元論、具象的一元論、主觀的觀念論、客觀的觀念論等の自然に對する哲學說を一團として握り潰した鐵案を得た。

宇宙は空であるから、

宇宙は無限である。

吾人は宇宙であるから、

吾人は空である。

次に又

宇宙は形體があるから、

宇宙は實在である。
吾人は宇宙であるから、
吾人は實在である。

次に

吾人の思はず、見ざる時、
全界空である。
吾人は空より見るから、
全界即ち在り。

次に

有を去り、
空を去り、
吾人を去らば、
即ち悟道。

見よ、宇宙萬有は無體空相である、生せず、滅せず、垢づかず、淨からず、増さず、減らずである。見よ大空を、晴るゝも、曇るも、夜となるも、晝となるも、淡々として何の關する所らなきを。喩へば茲に一人あつて、大空に方器を置けば、器中の空氣も自ら方形をなすであらう。又一人あつて、圓器を置けば、空氣も亦圓形を成すであらう。二人各々方圓の器を擧げて、東西に走れば、器中の空氣も亦方圓の形を異にして東西に走る。而かも空氣固と方圓あるにはあらざるなりだ。亦去來せるにはあらざるなりだ、然れども、方圓の器破れず、去來の人休せぬ間は、空氣は遽然として、方圓去來あるを免れない。これ迷人の生死去來せる相である。

禪の悟道の秘訣の歌と云ふのが、これは太寧寺の虎關和尚の作に係るもの、

足を組み手を組むもの、主は誰ぞ、

たいひたすらに尋ね入るべし。

尋ね入る道をしるべの念頭の、

起るにつけて究めもてゆけ。

究めゆく宛にも角にも詮方な、

盡くる所をさして許すな。

許さじと指し向ふたる鐵壁を、

打ち砕くればはッと許りぞ。

はッといふ主人の御坐に居直れば、

寐ても醒めても天下泰平。

太平の御世に住む身の我等こそ、

徒ら坊のなまかはとなる。

なまかはと成り果つる身の末は何、

春は花見に秋は月見ぞ。

と。又道元禪師が大悟の訓に、

大悟と云ふは心は本より不生なり、法は本より無法なり。煩惱本より、是れ菩提なり、心として求むべき心もなし、法として尋ぬべき法もなし、煩惱として断すべき煩惱もなし、本より菩提なるが故に、菩提として證すべきなしと悟るを大悟と名づく、

と。其の他禪偈に

踏破太虚空。 鐵牛也汗出。

十方無虚空。 大地無寸土。

出沒太虚中。 吹毛曾不動。

と。又一休和尚の道歌に云ふ。

あら樂や虚空を家と住なして、

心にかゝる造作もなし。

と。これ皆禪の宇宙觀である。宜しく味ふべき語であらう。

第六章

千秋萬古不變の一物

物質の不滅……勢力の恒存……國家の滅亡も時節到來……まさかの時に役に立たなければ……理に契ふも悟りにあらず……テカ
 ルトの言……趙州狗子の佛性……常恒不變の本體……有無を離れ
 なければ不可……禪語由來謎的……真把上人の教訓……空界無染、
 本來無一物……背後の一人……坐禪の要術……白隱禪師の歌

千秋萬古曾て變はらざる一物がある。これ何物であらう。よろしく靜慮觀察して見るがよい。科學者てふものがこの世にあつて、能く金石を分析し、草木を分類し、動物を開剖し、凡そ手に入るものは悉く機械を以て研究を試みる。斯くて漸くにして金石にも植物にも動物にも、凡そ吾人の經驗し得らるゝものゝ範圍には一定の理法てふものが存在して居る。其は何か、曰く物質の不滅。勢力の恒存これである。これは永久確實に

存在するものであつて、假令金石が熔ろけても、動物が斃死しても毫も滅滅することがないと稱してゐる。之は成る程、何人も承認せでは已むべからざる定則であるやうだ。しかし、若し百尺竿頭に一步を進めて、然らば其の物質は何處から來つた者であるか、其の勢力は如何にして發生し來つたのであるかと問ふたならば、如何に答ふるであらうか。また汝は物質は不滅にして勢力は恒存であるといふからには、汝の死するのも死するのではなく、物の破壊するのも滅無に歸するにあらずだ。されば國家の滅亡も時節到來だ。只所有主の變はるばかりで眞に亡滅したのではない、人の死するのも只電子や細胞の移轉するばかりで依然として存在することは存在するのだ。されば何をか憂ひ、何をか悲まむやといふわけになる。されど、己が國家が今や亡滅しやうとする時に際して、依然として冷靜に、其れは時節到來であると傍觀坐視してゐられやうか、將た又卒然として人あり來つて汝に白刃を加へんとして振りかざしたな

らばどういふ感じが起るか。凡そ理法てふものは何處までも通用し得らるゝものでなければならぬ、物質の不滅勢力の恒存も、もし汝自身の生命に關する一大事到來したならば如何であらうか。物質不滅、勢力恒存と稱へる其の聲を慄はさねばならぬではないか、心臓に慄氣させずにゐられるであらうか。彼等は曰ふであらう、假令我れは怖るゝとも不滅の理、恒存の理は永久存在すと。然り其の理は誰人も知つて居る所ではあるが、まさかの時の間に合はざれば何の要がある。恰かも過食の害と、適度の運動の利なることは誰人も知つてゐるが、之れを實行することが出来ねば知らざるに同じことである。これと同じく、物質不滅、勢力恒存の理を知つても、まさかの時に役に立たなければ何の要にもならぬ。加之ならず、其の不滅恒存の理も只汝が知り得たる範圍内の事物について研究し得たいだけで、未だ汝の知り得ざる事物に何程の異なりたる理法が行はれてゐるかも知れぬではないか。亦汝の覺醒し知覺し居る間こそ、

斯く汝は承認するだらうか。汝若し熟睡し、悶絶し、若しくは絶命したならば、斯ういふ理法の果して存在するかどうかどうして知ることが出来るか。また天變地異一瞬時も靜止せず、刻一刻に變化しつゝある宇宙だ、汝が知り得たところの理法が何時如何に變更するかも測知することが出来ないではないか、されば汝の所謂恒存不滅の理法も嚴密なる經驗論者の許容し得べき、萬古不易の定理とは言ひ難い。されば石頭和尚の參同契に

理に契ふも亦悟りにあらず

といふてある。能く味ふべき語である。

我思ふ故に我在り

と、哲人デカルトの云つた如く、實にや宇宙といひ、萬有といふも、其の思ふが故に在りとしたならば、思はなければ存在せぬと言はるゝ譯ではないか。例へば汝がもし無意識の状態にあつたならば汝は汝の存在を

すら認識せぬでからう。即ち汝思ふが故に、茲に宇宙もある、神もある、萬有もある、活力もあるとしたならば、汝が思はざれば是等何物も存在せざることになる道理である。されど事實は之れに反して、汝は思はねども花もある、月もある、樓臺もあるではないか、この事實は汝と關係なきに似てゐるではないか。

一僧あつて趙州和尚に問ふた、

狗子に遠つて佛性有りやまた無しや

和尚答へて云ふ、

無し

と、他日又同じく問ふた、

狗子に佛性有りやまた無しや

和尚答へて云ふ、

有り

と。これこの佛性とは恒常不變の本體を云ふので。神といふも可、佛といふも可、靈體といふも可、絶對といふも可。大我と云ふも可、且つ敢て必しも狗子即ち犬に限つたわけではない、鼠であれ、猫であれ、山であれ河であれ、天地、草木、家屋、生命、觀念、思考であれ。即ち天地間の有らゆる何ものでもあれ、宇宙間のあらゆる何ものでもあれ。吾人でもよし、他人でもよし、小兒にでもよい。又瞬間であれ、永久であれ。趙州は云ふ、無しと。復云ふ、有りと、有無を離れなければ即ち不可である。常恒不變 本體、神、絶對は斯くの如きものである。而して吾人は此の常恒不變の本體の中に生存して居る。神の中に、絶對の中に生存して居るのだ。而して其は或は有、或は無、有無を離れて眞の面目がある。試みに有無を離れて見るがよい。如何の状態となるであらうか。少くとも、其の世界觀、其の人生觀は從來の見解とは相異の點を發見するであらふ。

禪語は由來謎的である。門外漢の了解に苦しむところである。されど、宇宙の秘密は左程容易に解釋さるゝものではない、彼の一知半解の學者輩が、頻に見神だの、見佛だの、天地の眞理を知つたなぞと叫ぶが、忽ちにして其の根柢から説破し去られてしまふ所以である。趙州和尚は六十にして始めて道に志した、しかも彼れは斯道に於て其の神域に達し、自由郷に逍遙し得た。されど決して輕々に到達したのではない。實に斯道は信を以て能入するのであるから、誠心を專にせなければ不可能である。誠心に専らにして實參實究したならば、假令大悟の域に到らぬまでも、他の如何なる修養法よりも有効なるとは史實の證明する所である。もし輕意慢心を以て此の道に入らうと思ふたら、それこそ恐らくは魔道に陥るであらう。一步を過らば天地懸隔とはこれ等の事をいふのである。

大嚴寺貞把上人の言ふ、

佛法修行はいかにしても心を攝むること五十年三十年、靜かに工夫思案するが第一なり。世間を打ち捨つる心持にて思案一片に心を致すべく候へ。たとひ悟道得法するとても修行なくして打ち過れば自理を失ふべく候へば、其の用心肝要に候。されば古人も悟道は易く修行は難しと言へり。又は大事を明らめても、父母を一度に殺してある心持にて工夫せよと言へり。尤も有り難きことどもなり。この様なること眞實の佛法にて候へ。今ときの佛法の扱ひは一向外道の法にて候と。一事は萬事といふから、何事にでも凡て斯くの如き熱心を以て従へば人生何事か成らざらんやだ。然し吾人の生命は左程永くはないから。吾人は尤も永久なる、而して尤も貴重なる、尤も堅固なるものに向つて心を傾けなければならぬ。然らば其は佛か、神か。否、佛や神が眞に永久であるか貴重であるか、堅固であるかは、前の趙州和尚の答話を會得せなければ何等の効益はない。彼の學問の最奥と稱せらるゝ哲學と雖ども、

彼の答話を了解することは容易でない。畢竟幾多の哲學者は皆彼の答話の中に彷徨して一生涯悟り得ないでしまふのだ。即ち有無の中間にブラブラして居る瓢箪學者ばかりだ。而かも徒らに推理を凝し、分析を逞ふして、何の得る所もなかつたのだ。迷の上に迷を重ね、遂に狂氣になつたものさへあつた。神を信するもの、佛に依頼するものも、若し眞に神を見、佛を拜したもものならば、彼の答話を易々として解釋し得らるゝのである。もしさうでなかつたならば、只一時の慰安を神によつて僅に繋ぐに過ぎぬといふべきである。

達人は能く宇宙を外にする、人生を外にする。身體を外にする、願望を外にする。觀念を外にする。外にし、外にして、遂に外にすべきもの無きに至る。空の又空、空界無象、本來無一物の境界であるのだ。

此の境界に到つて初めて、

聞の夜に鳴かぬ鴉の聲きけば、

生れぬ先きの父母ぞ戀しき。

を悟り得らるゝのである。趙州和尚の無字を悟了することも出来る。人生に苦痛なきことも悟了することが出来る。煩悶なきことも悟り得らるゝのである。神が天地を創造せざる以前、神が生れぬ以前、神の噂もない以前。即億兆以前、空劫以前をも悟り得らるゝのである。もし汝の生れなかつた以前を悟り得らるゝものならば、汝の死滅以後の事をも悟り得らるゝわけである。斯くの如くにして能く常恒不變の本體を悟り得ることが出来る。趙州の有も悟得ることが出来る。即ち有無に涉らぬ本體を悟り得るのである。されど向はんと擬すれば即ち背く。理に契ふもまた悟りにあらざること了得して。全く己れが經驗と融會し、己れの欲すところに従つて矩を踰えざるにあるのだ。

然し、これは智識でもない感情でもない、無論意志でもない。何となれば汝が既に何事かを思想上に浮べたとしたならば。其の背後に一人あつ

て、其の浮べたるものを批判し解釋して居る者があるからである。其の背後の一人こそ求むるところのものである。本體は斯くの如きものである。道元禪師が言ひたる、

箇の不思議底を思量せよ、不思議底如何んか思量せん、非思量、これ坐禪の要術なり、

と。如何くと研究し、寒中に汗を流し、熱中に涼を覺ゆるまで考察すべきである。單に言語文字に拘泥し、書籍の表にのみ求むべきではない。或は静坐し、或は激務に服しつゝ其の何物であるかを思へ。もし是れであると自ら認め、そが眞偽を究め兼ねたなら試に外界に向つて眼を放つて見るがよい。外界の經驗と能く融合して我が思想と衝突するなきや否やを。第二念の起らざるや否やを問へ。第二念とは、美花を見て美であるとするのは第一念である。更に之れを欲しいと思ふが如きは、即ち第二念である。また能く宇宙は平等の實相と見え得るかドウかを檢して見

るがよい。此の世を極樂と見えるかドウかを檢して見るがよい。常恒不變にして神と同年、佛と同壽であると言ひ得らるゝであらうかドウかを檢して見るがよい。

白隱禪師歌うて曰く、

夫れ摩訶衍の禪定は

賛歎するに餘りあり

布施や持戒の諸波羅密

念佛懺悔修行等

其品多き諸善行

皆此の中に歸するなり

一坐の功をなす人も

積みし無量の罪亡ぶ

惡趣いづくにありぬべき

淨土即ち遠からず
辱くも此の法を

一たび耳に觸るゝ時

さんたん隨喜する人は

福を得ること限りなし
いはんや自ら回向して

直に自性を證すれば

自性即ち無性にて

すでに戲論を離れたり

因果一如の門開け

無二亦無三の道直し

無相の相を相として

行くも歸るも餘所ならず

無念の念を念として

謠ふも舞ふも法の聲

三昧無碍の空ひろく

四智圓明の月冴えん

此時何をか求むべき

寂滅現前するゆゑに

當所即ち蓮華國

此身即ち佛なり。

人遊歐米適四天、
佛性自他來去絶

我向一心崇佛仙、
仙身不滅億千年

(坦 山)

第七章

宇宙萬有の歸趣

上天を柱へ、下地を壓す……宇宙の根元、人生の極致……世界の始めにして同時に終り……怪の怪、奇の奇……規則定木を以て宇宙人生を律せんとする……群集に入つて一大神秘を悟道する底の眼識……五官の誤り……智識の誤り……宇宙の本體……宇宙の本は百合の花……一莖草は丈六の全身……基督の天國……吾人即宇宙の本體……汝自身を識得せよ……無門關……登山禪師の語……布袋和尚の歌……溪聲即是廣長舌

茲に一物あり、上、天を柱へ、下、地を壓す。而して億々萬年の昔より存在し、億々萬年の後までも存在す。無限大の空間を包容し、無際限の時間を填充せり。其の動くの速なるや迅雷耳を掩ふの暇なく、其の靜止

して動かざるや恰かも須彌山王の如くである。而して一たび之れを認得したならば數千年の大疑問も豁然として一時に氷釋する。又、彼の絶待の自由をも獲得すべく、或は神域に悠遊することも心の儘である。更に人生の樂園に逍遙することも自由に出來るのだ。科學者は之れを以て物質だ、勢力だと云ひ、哲學者は之れを呼んで實體だ、理性だ、不可知的だと云ひ、宗教家は之れに名づけて神だ、佛陀だ、真如だと云ふ。知らず、孰れが真であるか、孰れが偽であるかを。是れが即ち宇宙の根元であつて、又人生の極致である。吾人は今假りに名付けて靈體と云ふ。靈體と云ふと雖どもこは必ずしも精神ではない。相對を脱したる唯一絶對の靈體である。而して此の靈體たるや、直に吾人の本體であつて、復た宇宙の本體である。もし數學上の言葉を借りていふならば點であつて復た線である、方であつて復た圓である。一にして十、多にして少、有にして無、無にして有、身にして心、心にして身、

世界の始めであつて同時に終りである。般若には之れを色即是空、空即是色といふてある。もし凡慮によらば斯くの如きは頗るこれ矛盾撞着の甚しきものゝやうに思へるけれども、其の矛盾撞着を能く超越したる時が即ち本來の面目坊の立姿である。これ怪の怪、奇の奇、誰れか能く斯くの如きものを考察し得るであらうか。されども人生には奇怪のことも澤山ある。到底定木を以て直角に仕切るとは出来ぬ、水平に準ずることとは出来ぬ。或は直線に、或は曲線に、或は正圓、或は楕圓、或は苦、或は樂、これ世相であつて毫も疑ふ餘地を見ないのである。然るに此の種々複雑騒然たる世相を知らないものは、己れが隨意の規則定木を以て悉く宇宙人生を律せんとする。衝突これより起り、撞着これより生ずる。故に正直者は苦しみ多く、律儀ものは氣を損ずることが甚だしい。曲木を曲木として、始めて直である。圓を圓として始めて正である。又能く、曲の中に直を見、直の中に圓を認め、苦の中に樂を知り、樂の中に苦を

辨じ、人中に獸を脱し、植物中に人道の意義を發見し、人の群集に入つて一大神秘を悟道する底の眼識があつて、始めて慈直に宇宙の奧秘を會得することが出来る。

世人は南方に向へば、北方を知ることが出来ぬ、東方に向へば、西方を知ることが出来ぬ、我れを觀念すれば、彼れを忘れ、渠れを觀れば、我れを忘れてしまう。生るゝを知つて、死するを知らぬ、死するを知つて、生るゝを忘る、然るに宇宙は同時に東西南北である。同時に彼我である。同時に生死である。然るを人は何れも一方に向つて走り、而して其の他を閉却する。故に永久研究して、永久知らぬ、即ち不可解である、神秘にして解すべからずと遂に降參する所以である。

これこの一物、即ち靈體を認めることが出来たならば。斯くの如き疑問は之れを解決すること、決して困難ではない。ましてや人生をやだ。

吾人の五官は住々真相を誤まることがある。彼の山の端出づる時の十五

夜の月は團々として大きく、漸く登つて中天に懸るに至れば、甚しく其
 大きさを減じたるやうに覺ゆるではないか。若し其れ終日無事に坐し、而
 して常に珍珠佳肴に飽けば食慾が毫も起らぬ、箸を取るだに懶くなる。
 之れに反して一定の業務に従事し、孜々として身體を勞するものは、麥
 飯に粗菜も恰かも山海の珍珠の如く美味である。人の覺感の當てになら
 ぬことは斯の如くである。吾人の智識と雖も亦た屢々全く轉倒せる考へ
 を抱くことが多い、多少の誤謬の如きは殆んど常のこと、言つてもよい
 位だ。彼の東西幾多の哲學者と稱する輩の如き、各々己が隨意の學說
 を立て、以て、宇宙の眞理茲にありといひ、人生の解釋茲に盡くせりと
 叫ぶ。各々一方を執つて他方を排す。其の狀恰かも藥種店の各々我が家
 こそ元祖なり本家なり、と稱するに異ならずだ。而して其の他の學說を
 獨斷的なりと排斥し、自ら批評的であると高擧するのであるが、焉んぞ
 知らん自らも亦た一個の獨斷說に陥つて居ることを、畢竟するに僅かの

研究を以て宇宙全體、人生全體を解釋しやうと試みるのは針を以て大海
 を探るに異なるなきを得んやだ。然るに各々其の一片を執し、終生其れ
 に拘泥して、遂に生涯其を解脱することが出來ないのは、甚だ陋いでは
 ないか。禪では之を擔枷帶鎖の癡漢といふ。
 次に宇宙の本體は何であるかといふに。或は物質であるといひ、或は精
 神であるといひ、或は物質と精神とは一實體の兩面であつて、其の一實
 體こそ宇宙の本體であるといひ、或は理である、或は氣である、或は理
 氣合一であると云ふ説もある、これ等の學者は或は分析し、或は綜合し
 て、之れを談じ、之れを論ずるも、たゞ之れを談じ、之れを論ずるまで
 に止まつて、更に自得してゐない。畢竟座上の水鍊、口頭の耕耘であつ
 て、依然として元の默阿彌に了るではないか。東西古今の哲學者であつ
 て其の學說として、其の思想としては整然たる體系を造りながら、毫も
 其れと關係なき神教によつて僅かに安心立命を求めたものが往々あるの

は何ういふわけであるか。他なし、これ宇宙の本體を未だ了得し、體得せぬからである。しかしながら、宇宙は一大怪物である、豈に之を輕々に論斷し得べけんやで。難中之難、無可之難と云はねばならぬ。宇宙の本體とて、別に去つて之を遠方に求むるには及ばぬ。柳は緑り、花は紅である、松竹櫻當位即妙また芭蕉無耳聞雷開。葵花無眼隨日轉等いふのが即ち宇宙の本體の發現である。たとへば茲に一個の百合の花ありとせよ。而して之れを以て宇宙の本體として一考して見るがよからう。全宇宙は全く此の一輪の百合の花の爲に存在してゐるかのやうに見える。百合は其の自己生育の爲めに、彼の蒼々たる天に太陽をして光りと熱とを發せしめ、星辰を羅列せしめ、時あつては雨を降らしめ、土地をして適當の肥料と水液とを送らしめる。而して尙ほ其の土壤をして安全ならしめんが爲めに、更に他の土地と連絡せしめ、其をして尙ほ廣からしめんが爲めに大海を四方に廻らし、人類を棲息せしめ、社會を構成せしめ。

斯様にして百合から主觀的に見るときは、全宇宙は悉く此の百合の爲めに存在し、百合の爲めに活動してゐる事になる。されど豈に管に百合のみに限らんや。若し夫れ一塵を拈じ來つて本體とせば、大地虚空、悉くこの一塵の爲めに存在するに過ぎないことに至る。無門云ふ

會するときは同一家、會せざるときは萬別千差。

會せざる時は同一家、會するときは萬別千差。

之れを要するに宇宙間の萬有は悉く一個靈體の活動であると謂はざるを得んのだ。然れども百合を拈する時に於ては、百合は宇宙の本體であり、其の他の萬有萬象は悉くこれ百合の眷屬である。又一塵を立する時には其の一塵は宇宙の本體であつて、其の他の萬物は悉く其の眷屬である、禪僧の公案に、一莖草を拈じて、丈六の全身となすとあり、又拂子を拈起して山河大地只これ、と言へるが如きは此の消息である。さはいへ、之れが一片を固執して、強ひて宇宙の本體は百合のみである、一塵のみ

であるとして拘泥したならばこれまた偏見たるを免れぬ、偏僻の見は遂に眞を失してしまふ。これ其の怪物たる所以である。

耶蘇基督は天國は近づけり、悔ひ改めよと叫び、神よ我れを捨てたるかと叫んだが、吾人は上天に果して神なるものがあるかドウか知らぬ、果して此の宇宙間に天國といふ處があるかドウかも知らぬ。されど之を以て吾人はキリストの胸の中には慥かに存在すべく映じたるを疑はない。されば神及び天國は上天に存在せずしてキリストの胸の中にあつたのである。故にキリスト云ふ「天國胸にあり」と。約翰傳に

我れ我父の中にあり、而して爾我れにあり、
而して我れ爾にあり、

と。これ神は外界に求むべきものでない。神は我方寸の中にあるといふ意である。されどこれキリストの胸のみに存在すると思ふは誤りである。若し神が基督の方寸の中に存在するとせば、吾々も亦悉くこの神を胸中

に抱いて居るのである。涅槃經に「一切衆生悉有佛性」と言ふたのはこゝである。趙州和尚が屋裏の眞佛と言つたのもこれである。又朝々佛を抱いて起き、夜々佛を抱いて寝ると云ふたのもこれである。

であるから、吾人を一個の宇宙の本體として拈する時は天地萬物悉く吾人に收まるのである。若し我が心を花に向け、全力を其れに注げば、我の本體即ち花に轉じて花が宇宙の本體となる。若し藝術に全力を傾倒するときには、我れ及び全宇宙は全く空亡して、宇宙間たゞ藝術のみを見る。換言せば神は藝術となり了るのである。其の技神に迫るとは斯くの如き妙處に到つた藝術を言ふのである。乃ち宇宙の本體は自己自身であるとしたならば、汝は汝自身を基本として宇宙人生を觀じなければならぬ、まづ汝自らよく自身を識得して見るがよい、さすれば自然他身をも識得することが出来る。従つて天地萬物をも識得することが出来るわけだ。試に自ら問へ、汝は何であるか。衣服か、頭か、四肢か、身體か、將た

思考かと、先づ第一に其れを解決せなければならぬ。既に其れを解決し得たならば、宇宙といひ、人生といひ、何等の障害もなく解釋し得るばかりでなく、汝が見て以て實體である、神であると断定するものは、皆汝が身内の或る一物に外ならぬのを悟るのである。彼れ心理學者は心意の現象を攻究し得るも、心意の本體は毫も之れを攻究することが出来ぬ。彼れ認識論者は認識の主體を論究するも依然として能認識の體が所認識の體を論究するのみだ。利刀も利刀其物を切ることは出来ぬ、理髮師も自身を理髮することは出来ぬのと一般である。實在論者は既に能認識の體を會得しないから、遂に其の真相を得ない。されば何物かよくこのこれが主體、即ち靈體を攻究することが出来るか。云ふ迄もなく其れは禪である。禪を措いて他にこれが解決をなすに足るものは未だ會つてないのである。この靈體は直ちに宇宙の本體、即ち宇宙の靈體と一致する。否、それ即ち其物である。

明鏡を能く磨かば萬物明かに其影を映するが如く、一心明かなれば萬法自ら明らかなるに至る。然し其の本體の何物であるかを知らなければ、永久に果して何物が宇宙に於て最大であるかが明了にならぬ、爲に徒らに感覺想像等の心意作用を捕捉して、これが本體であるとしてゐるのだ。無門關頌に

學道之人不識眞、只爲從前認識神、
無量劫來生死本、癡人喚作本來人、

だ。請ふ試みに汝の靈智に照して汝の主體は果して何物であるかを攻究して見るがよい、神か、佛か、石か、瓦か、何物であるかを默考して見るがよい。汝の如何なるものであるか、宇宙の如何なるものであるかは髣髴として汝が眼前に現れ来るであらう。

瑩山禪師は最も明かに此の間の消息を教訓してゐる、
這箇これ阿誰ぞ、曾て名を知らず、身と爲すべきにあらず、心となす

べきに非ず。慮らんと欲せば慮絶し、言はんと欲すれば言窮す。癡の如く凡の如く、山高く海深く、頂を露さず、底を見ず。縁に對せずして照す、眼雲外に明なり。思量せずして通ず、宗默説に朗らかなり。乾坤を坐断し、全身獨露す。没量の大人は大死人の如く、一翳の眼を遮るなく。一塵の足に受くるなし。何れの處にか塵埃あらん。何物が遮障を作さん。清水もと表裏なく、虚空終に内外なし。玲瓏明白にして、自照靈然たり。色空未だ分れず。智境何ぞ立せん。從來共に住すれども、歷劫名無し。三祖大師且らく名づけて心となし、龍樹尊者假りに名けて身となす。佛性の相を現はし、諸佛の體を表はす。此の圓月の相は缺くることなく、餘ることなし。即ち此の心、便ち是れ佛なり。自己の明光、古に騰り今に輝き、龍樹の變相を得、諸佛の三昧を成す。心もと二相なく、身更に相像に異なる。唯心と唯身と、異と同一とを説かず。心變じて身と成り、身露れて相分る。一波總かに動けば

萬波隨ひ來り、心識わづかに起れば萬法競ひ來る。謂はゆる四大五蘊遂に和合して四肢五根忽ち現成す。三十六物十二因縁に至るまで造作遷流し、展轉相續す。但だ衆ろの法を以て合成して有り。ゆるに心は海水の如く、身は波浪の如し。海水の外に一點の波なく、波浪の外に一滴の水なし。水波別なく、動靜異ならず。ゆるにいふ、生死去來眞實の人、四大五蘊不壞の身。

と、布袋和尚も歌う 曰く、

只箇心心是佛、十方世界最靈物、
縱横妙用可憐生、一切不如心眞實、
騰々自在無所爲、閑々究竟出家兒、
若睹目前眞大道、不見纖毫也太奇、
萬法何殊心何異、何勞用更尋經義、
心王本自絶多知、智者只明無學地、

眞理に體達したる消息を述べたものである。

一切の法、實に生滅せずんば、則ち一切境界差別の相なし。寂滅一味なり。名附けて眞如、第一義諦、自性清淨心となす」かの自性清淨心は分別の相なきを以て、湛然圓滿なり。分別の相なくんば、一切の處において在らざるはなし。在らざるなきを以て、能く一切法を依持建立す。」又次に彼の心を如來藏と名附く、所謂無量、無邊、不可思議の無漏、清淨、功德の業を具足す。

(大集會正法經)

非聖非凡復若乎、不驅分別聖情孤、無價心珠本圓淨、凡是異相妄空呼、人能弘道々分明、無量清高稱道情、携錫茗登故國路、莫愁處々不聞聲、宗鏡錄に云ふ

成觸目之菩提、得現前之三昧、

同云ふ

境是即心之境、心是即境之心、能所以分一體無異、

東坡は詠じて云ふ

溪聲即是廣長舌、山色豈非清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何舉似人、

これ皆心境一如の當體、即ち宇宙の靈體と我と冥合一致して一體無異の

第八章

禪より見たる人生

自覺の域に到達した時が宇宙人生の起源……地球と彗星が衝突……解くればもとの野原……空見の外道……印度の一家婦……宇宙萬有の眞理……茶碗……世界の相……肉體と精神……死滅は絶無にあらず……世界の不滅、人の不滅……造物主……放蕩息子と父母……神の干渉を許さぬ……常恒不變の因果律……悟道、解脱……我よく宇宙を造る……主觀と客觀……我れに増減なし……悟道の人……宇宙は大我

宇宙人生とは何であるか、これが解決をなすには其の宇宙人生の始源から説かねばならぬ。

吾人が生れて物心が付き、眼以て睹るを得べく、耳以て聽くを得べく、舌以て味ふを得べく、身以て觸るゝを得べく、鼻以て嗅ぐを得べく、意

以て思ひ得べきに至つた時を以て、先づは宇宙人生の始源と云つてよからう。

彼の茫々たる過去無數劫に遡り、極微分子の動化、天體の運行から、生物の進化則ち猿屬の化して吾人人類を形造るに到つた經歷を説明するなどの事は、之れより後の出來事に屬するのである。

吾人自身に於て、只間接に關係があるとしても、實は往々にして直接に關係あるのが例だ。であるから吾人自覺の域に到達せし時を以て宇宙人生の起源とする。されば宇宙とは何であるかといへば、即ち只斯の如きのみだ。人生とは何であるかといへば即ち我れは今朝飯を喫し、茶を飲んで、散策をした。然らば過去は如何、曰く未來の如くだ、未來は如何、曰く過去の如しだ、さらば現在は何、これから家に歸らうとする。家に歸りて後如何かする、大に働かう。働いて後ドツする、食事をして臥る計りだ。今年三月我が地球は彗星と衝突して粉碎されんといふ、

汝如何するか。我れ關せず焉だ、固より我れといふものもないのであるから、然らば爾は空無であるか。否、斯の如く談話して居るのを見ないか。然らば爾は幻影のやうなものか、否、我れ五體、四肢、三百六十の骨節、十有三種餘の原素から成り、儼然としてコ、に存在せること此の如くだ。然らば爾は先きに我れといふものはないと云つたのはドウいふわけか。曰はく、

引き寄せて結べば草の菴なり

解くればもとの野原なりけり

だ、然らば爾は全く此の人生を無意味とし、何等の快樂もなく、活動もなく、人生の義務もなく、永久の理想もなく、國家の觀念、人道の大經などに獻身的努力をなす必要等はないと云ふのが。否、否、否、爾は未だ道を知らず、人生を悟らないのである、斯の如きはこれ偏空的俗僧の觀じたるところであつて、佛陀は之れを空見の外道と呵した、苟くも活

僧たり達人たるもの、取らざるところである。

元來存在して居ると思惟するものが、忽ち紛失すると大いに落膽する。が、元來無しと思ふたもの、無いのは當然として心を動かさない、有つたならばそれは剩餘として喜ぶもよい。昔し印度に一寡婦の話がある。

夫の忌日に僧を請じて供養した。盖印度の風俗として僧に齋を供養して説法を聽聞するのが例としてある。然るに此の僧無學愚鈍であつたから、説法をするのが出来ぬ、齋が了つて寡婦が僧の前に俛いで、今かいまかと僧の説法を待つてゐた、所が此の僧が潜かにヌキ足サン足で逃げ歸つてしまつた。良々久しくして、寡婦は頭を擡げて見ると今まで慥にあつたと思ふ僧の姿は忽然として空無となつて仕舞た、此の時この寡婦は、思はず萬有の無性なることを悟り、而して彼の僧の跡を追うて、遂に其の僧を濟度した。

と、此寡婦は何者ぞ、彼は曾て哲學を攻究したのでもない、科學を實驗

したのでもない、然るに宇宙萬有の眞理を悟つた。之より後の寡婦は如何に人生に處したか、傳聞明らかでないから、得て之れを知るによしなきも、優に達人として絶對の自由郷に逍遙悠遊したことは疑ひない。吾人の生るゝや、元より父母に由りたることは誰れ人も知る所である。只偶然に生れて來たのではない。例せばコ、に二個の茶碗があるとしやう。この茶碗は陶物師が土を以て造つたものである。而して之れを造る動機は何んであらう、言はずとも知る、之を使用せんが爲めに造つたのである。されど茶碗といふ本體は果して何であるか、これ茶碗と云ふ。吾人の觀念であらうか、將た又土であらうか、もし吾人の觀念であるとするも、茶碗自身は何等の自覺も思想もないのである。又土だとしたならば茶碗自身の本體てふものはないのである、されど既に茶碗である、觀念でもなければ、土でもない、而して茶碗としての體相があれば、從つて茶碗としての作用があることは當然ではないか。

世界は七十有餘の原素から成立つてゐる。之れを分析し、之れを剋實して見たならば、只原素のみにして世界てふ相は何にもない。況んやまた桑田は變じて海となることあり、海底浮んで島となることもある世の狀態であつて、毫も一定不變の相としてはないではないか。然らば世界只觀念のみであるか、將た又原素のみであらうか。否、々、々、既に世界といへば即ち世界である、觀念でもなければ原素でもない。而して既に世界としての體相があれば、從つて世界其のものゝ作用がなければならぬ。人は通常肉體及び精神から成立つてると稱せらるゝ。しかも佛説には四大五蘊の假和合であるといつて居る。兎に角數種の原素が化合し、父母の因縁によつてコ、に一個の人てふものが出來たのだ。而かも精神なるものが別に存在するわけではない、實は肉體と同時に實在して居る。精神がもし獨立に存在して居るとしたならば、人の死する時、何れかへ去らなければならぬ。世の宗教家は或は天國へ往き、地獄へ墮落すると言

ふけれど、其れには特別の意味があるので、彼の靈魂の不滅説は禪には要不着である。吾人の實驗によれば、人の死して甦生せしものは、毫も死せし時以後の状態を知らぬといふ。されば肉體の死滅は同時に精神の死滅と云はねばならぬ、然らば精神は絶無に歸するものであるか、死滅は絶無ではない、たゞこれ死滅だ。然らば一體肉體外に精神はないのであるか、否催眠術の實驗によれば被術者に若し氷塊を與へて、これ火であるぞとの暗示を與ふれば大いに熱を感じるのみでなく、又火傷をなすことがあるではないか。これ物質のみを以て判断することの出来ぬ證明である。随つて或は身體は精神の所現であるといひ、或は精神は身體の作用に過ぎないといふものあるに至るのだ。开は孰れにしても既に一個の人といへば一個の人である。單に身體ばかりでもなければ單に精神ばかりでもない、其等を包含して一個の人を組織するのだ、而して人の體相があり、作用がある。一個の茶碗は全力を盡して茶碗の義務を果さう

とし、世界は其の全力を盡して、其の義務を果さうとし、人も亦其の全力を盡して其の義務を果さうとする。しかも時ありてか、茶碗も不利益の位置に立ち、或は破壊せられることを免れぬ。破壊せらるゝも、只其れ本來の土に歸るのみ、茶碗てふものゝ存在は永久無限である。これ豈に獨り茶碗のみならんやだ。世界も亦然り、人も亦然りである。これ宇宙の原則である。然るに茶碗は飽まで永久其の原形を持續しやうとし、世界は永久破壊せざらんとし、人は永久に死せざらんことを願つたならばドウであらうか、これ眞理に背くのみではない、到底不可能だ。茶碗は破壊して茶碗の作用がなくなつても、茶碗は永久不滅である、世界は破壊して世界の相がなくなつても、世界は依然として永久不滅である、人は死して人の作用はなくなつても、人たるものは永久不滅である。しかし之れを、敢へて靈魂とは言はぬ、肉體とは言はぬ、たゞこれ人である。而して人は元來原素の集合、四大假和合に過ぎないから、其の死滅

の時期に際するも敢て愁傷狼狽してはならぬ。斯様に云ふたならば、人或は言ふであらう。一時結べば草の庵りにて、解くれば元の野原の如きものと観じたならば、人生は如何ばかり寂寥たるものであらう、殺風景ではないか、餘りに理に偏して情を顧みないではないか、明鏡止水の如く、枯木寒巖の如く、秋風蕭殺たる如く、無爲寂靜たる如くで、人生に對して毫も執着なく、物來れば之れに應じ、物去れば即ち關せざるが如きことを、果して得らるゝであらうか。この複雑なる人生、或は艶陽三月百花爛漫を呈しては恍然として酔ひ、陶然として眠る。或は別離を惜んで、腸九回、杜鵑血に泣くの嘆をなし。或は時に感じては虎狼の牙に身を投じ、猛火に生命を投ずる者もある。斯くの如き情熱燃ゆるが如く、湧くが如きものがあるではないか、然るにたゞ一時的集合體で、即ち機械的の人、機械的の世界としたならば、此等の活動、此等の感情は何れから來つて、而して何れへ去るのであらうか。思ふに人には一定の目的

理想がある、これ神より賦與せられたるものであらう。世界にも亦一定の目的理想がある。これも亦神の造り玉ひたるものであらう。されば吾人は今死するも、死後尙ほ永久存在すべく、世界も亦益々神の意志に近づくことになる。斯くの如く考ふるのを以て最も穩當だとはしないかと。否、々、々、大いに否、斯くの如きは未だ宇宙人生の眞を知らぬ輩である。

若し天地宇宙に所謂造物主なる神ありて、此の世界を造り、人を造り萬物を造つたのであるならば、其の神は如何なるものであらうか。斯くの如き世界を造り、斯くの如き人を造り、斯くの如き萬物を造つたところの神であるとしたならば、其の神と云ふものは誠に不完全、不公平極まつた神と言はねばならぬ。如何となれば、この束縛多き世界、苦痛多き人生、何の必要あつてか、神は斯くの如き不完全のものを造つたのであらうか。或る無頼放蕩の青年があつて、父母が其の非行を誠めやうとし

て懲篤に教訓した、所がこの青年の曰くだ、然り、自分は詢に無頼だ放蕩だが、何故に父母には斯の如き無頼放蕩のものを生まれたのであるか、自分は元來少しも此の世に生れ来るを願はぬのであつた、若し自分を氣に入らぬと思ふなら、生れぬ以前に戻すがよいと。其の言の悖戾非倫なるは固より聞くだに耳を汚濁するが、しかし若し造物主があつて斯の世界を造り、人を造つたのだしたならば、吾人は此の無頼放蕩兒の理屈を應用して責むることも得らるゝであらう。

之れに由つて是れを観るも、造物主存在説の非理憶説たることは明かに判かつたであらう。世界は到底神の意志の如きものゝ干涉を許さない、父母は到底己が意のまゝの子を生むことは出来ない。父は父としての意義があり因縁がある。母は母としての意義があり因縁がある。子は母でもなければ無論父でもない。父は子でもなければ無論母でもない。さればといふて此等をまた別々に分立することも出来ない。父母なきの子は

なく、子なきものは父母たるの資格がない、三者合一して、そして初めて親子と云ふものが出来、孝慈と云ふことが行はるゝのである。今世界にしてもまた此の理に外はない。草木土石を一々分析して、別々に孤立せしめたならば、此の外に世界はない。同じく合一したる所に意義あり因縁ありだ。人は世界に縁り、世界は人に縁る、個人は社會に縁り、社會は個人に縁つて成立つてゐる。これを相縁氣縁と云ひ、持ちつ持たれつ成り立つと云ふこゝに始めて意義あり因縁ありだ、此れ等萬有の外、誰れの意志でもなければ、誰れの命令でもない、これ常恒不變の因果律である。即ち原因結果の定則である。此の外に彼の神と云ふべきものが何れにかある。吾人の相因相縁するところにのみ宇宙があり、人生がある。嗚呼この危然たる宇宙人生とは即ちこれ斯の因果の理法によつて成つてゐるのである。神の創造などは未開人の空想に過ぎない。

されば宇宙人生は一面から見れば空無であり、一面から見れば實在であ

る。开して其の實體を言へば一面から見れば精神であり、觀念である。一面から見れば現象である、物質である、實在である。其の何れにもあらずして、亦た何れにもあるのだ。能く其の關係を知り、そして一片に偏せず、其の契機の奥妙を直観するのを禪にはこれを悟道と云ひ、解脱と云ふのだ。

されば我れよく宇宙を造り、人生を造り、世界を造つたとも言はるゝのである。これ蓋し永久の眞理である。大工が家屋を建て、學者が或る原理を發見し、農夫が田園を耕耘し。學生が智識を研磨する孰れも皆自己が世界を造りつゝあるのではないか。農夫の見たる世界は農夫だけの世界であつて、學者の見るところの世界とは異なる所がある。農夫は一見己れ以外の客觀界に往て耕耘するやうに思つても、其の實己が世界を開墾し、己が胸裡を耕耘するのである。換言すれば己が宇宙を構造しつゝあるのだ。學者は或る原理、例へば天文學上の問題、地質學上の問題、

社會上の問題を攻究しつゝある積りでも、それは己が胸中を攻究するに過ぎないのだ。されば教育も兒童に外界より知識を與ふるのではなくて、兒童の包含する知識を開拓するを以て最も上策とする所以なのである。これ或は主觀論に傾いたやうではあるが、實際の効果があるから仕方がない。

全體主觀とは何であるか、客觀とは何であるか。この問題は恐らく如何なる知識論者も一言にして答辨し得るものは少いであらう。抑々主觀と云ひ、客觀といふ語は、頗る曖昧のものゝやうである。吾人が突然に我が名を呼ばれて應と答ふる時に、我れなるものは何れにあるか、主觀は何れにあるか、其の答ふる聲は、客觀なる呼びし人の處に到るではないか。主觀と客觀とは劃然區分することが出来るであらうか。我れ世界を見る時世界は我れではなからうか。眼を閉ぢて獨り沈思する時、純粹の主觀なるものが何程あるか。其冥想するもの考案するもの、悉く客觀的

事物のみではなからうか。客観は事物てふものを除却し了つたならば、我れなる主観は殆んど空無に屬しはしないだらうか。しかも主観がなければ客観がない。高山大川草木禽獸はた人類社會に到るまで、我れもし考案思量せなければ、毫も其の存在不存在を謂ふことは出来ぬ。苦樂善惡邪正も亦悉く外界のものであつて、また悉く我が内界の物である。身體想像認識も悉く我れ以外であると同時に、また我が以内である。是に於て思ふに主観及び客観なるものは絶對的獨立のものではなくて、相對假立の名目に過ぎない。即ち或時は一家屋の主観であつて、或時は全世界の主観である。我れが擴充して全宇宙となり、全宇宙は我に占領されて仕舞ふのである、即ち客観は我れの爲めに吞却せられ、掃蕩せられて、客観は竟に空無となつて仕舞ふのである。しかしまた或時は主観全く客観に占領されてしまふこともある。或は一家屋の爲めに、一國のために、全宇宙の爲めに占領されて仕舞ふこともある。此時は主観は全く空無に

歸し、只だ客観のみとなり了るのである。

全宇宙を我れとするも我れに於ては些の増減はない。さればといふて全宇宙に我れが吞却せらるゝも、我れに於ては些の増減もなければ、損益もないのである。此の見地に立てば、則ち如何なる大事業を成して一世に豪快を示すのもよい。本來無一物の境界に安住するも亦よからう、取るは取るにあらず、捨つるは捨つるにあらず。無、無にあらず、有、有にあらず。洒々として萬象恒常なりだ、落々として清風明月なりだ。榮枯もある、苦樂もある、浮沈もある。而かも我れに於いては、絲毫も添へず、一塵も減じない。機を見て進み、變に應じて退く。與ふれば進んで取り、飽けば退いて捨つるばかりだ。是れが即ち悟道の人、否。達人の大観ではなからうか、吾人は斯る人を呼んで悟道の人達人の大観とする。されば達人は得意の時もたゞ淡然であり、泊如である。失意の時も泰然であり。自若たりである。而して自ら處るや超然、人に接するや霽

然、事ある時は赫然として蹶起し、其の進むや迅雷霹靂の如く、其の行動や電光火石の如しだ。事無ければ退いて水の如く澄む。故に胸中常に練々として餘裕がある。之れを喜ばすこともかたく之れを怒らすことも不可能である。心の底は常に洋々として春のやうであるから、我れに來る物も亦何れも皆駘蕩として春となるのである。

普燈錄に曰く

大地撮來粟米粒、一毫頭上現乾坤、

會元に曰く

一翹翹翻四大海、一拳拳倒須彌山、

と、これ宇宙人生を達觀したる、大悟者、大達人の活作略を云ふのだ。傳燈錄にも、

盡十方世界は是れ沙門の眼なり、盡十方世界は是れ沙門の全身也、盡十方世界は是れ自己の光明也。

とある。これ宇宙を我れとした境界である、宇宙は大我である、萬有の本源なりとするのである。

五城あり。一には山城、高きに懸り、險に據り、斷巖周圍なり。二には水城、江河を壑とし、沿流四しに遶る。三には沙城、曠曠懸遠、外に水草なし。四には土城、堅壁高壘、内實兵儲なり。五には人城、主聖巨賢、深謀遠略なり。斯くの如き五城は量宜しく、相敵すべきも、人城最も勝る。我が國の尊む所なり。

(華嚴經)

第九章

人生の目的

問ふ者も愚、答ふる者も愚……理想に向つて奮進……志道軒の話
 ……永富獨嘯……高議して及ぶべからざるは、卑論の功あるに如
 かす……山脇東洋……近松半二の戯文……耻といふことはない……
 笑はるゝも合點……扱その後は死ぬるばかりぞ

人生の目的とは何であるか、前來言ふ所にて略ぼ其の如何なるものなるかは知り得たであらう。さればかゝる問題はつまり人々の解釋に任すべき事柄で、問ふものも愚、答ふるものも愚だ。強ひて人生の目的は何であるかと云へば、萬人は一樣に答へるであらう、
 道を行へ、殊に汝が好める職業によりて、斯の道を行ひ、以て自己の本分を盡すにあると。換言すれば自己の理想に向つて奮進して行くの

であるといふに歸するのだ
 文士奇譚と云ふ書に云ふてある、

志道軒の性行、豪宕かくの如しと雖も、實は世に憤る所ありて然るものにして、卓犖不羈の天資、礪して緇せず。其の名既に都下に布くや、官、有司に命じて之を督せしむ。志道軒、笑つて曰く、我は狂人なりと、他事を言はず。有司之を放つて復た檢閲せず。爾後豪誕益々甚し。永富獨嘯は曠世の傑士、又實に近代儒醫の泰斗なり。其の壯年東遊するや、淺草の講肆に至り、志道軒の太閤記を講するを聴き、之と名字を通じ、屢々相交遊す。志道軒、獨嘯より長すること三十九歳、然れども視るに後進を以てせず、大に奇才を愛し、其の志す所を獎成して曰く、我れ、調舌を以て口腹を餽すること、殆んど二十年、與に語るべきものなし。今吾子を獲たるは、我が大幸なり。夫れ猛獸も孤疑すれば、蜂蠆の毒を致すに如かず、高議して及ぶべからざるは、卑論の

功あるに如かざるなり。古の人は道義を抱負し、而かも一世の用たる能はずして、耕漁に隠るゝものあり、之を爲すもの、乃ち其天下を愛ふるの心を以て、耒耜の利ならざるを憂ふるの心となし、其の人民を思ふの情を以て、網罟の密ならざるを思ふの情となし、百畝の田、五尺の水栖々焉として耕し、由々然として漁す、然れども豈に敢て一日も天下を忘れんや。故に夫の風雲の興舎に乗じて其の績を顯はし、水魚の遭遇を得て、其の志を伸ぶるものと其蹟異なりと雖も、しかも其の意未だ會て同じからずんばあらず。我が意、又此に在り、吾子亦能く此を知らんと。獨嘯、其の言の雋逸悲壯なるに服し、後之を山脇東洋に告ぐ、東洋屢々稱して曰く、竊かにこの一言を味へば、人意を憤發せしむべきものあり。斯人孰れか必ず英雄隱蹟の徒、怪誕自恣の言を假つて、其の沈鬱不平の氣を洩露するに非ざるを知らんやと。同書に又、近松半二の戯言を載せて曰ふ。

我は聖人にあらねば、天命は知らねども、五十に及んで、世界に耻といふことはない物なりといふ悟りを開いたり。尤も人の生れ付に、耻をせる心のあるは、仁義の端なりと、孟子はいふて置かれたれども、この耻といふ物も、時々品が替りて、孟子時分の耻といふは、人に媚諂ふことを第一とせしが、當世は左にあらず、随分富貴なる人に諂ひ、取り入つて其の蔭で、金錢を殖けると發明者、手柄者と譽むること故、是等は今の世では耻にあらず。分けて京大阪なぞにては、芝居役者といふものありて、たまく、大丈夫の男に生れながら、女の眞似をし、大振袖白粉紅を塗り、よい年をして、踊りつ、舞ひつ、是が耻を知りてなりさうな事では無いけれども自身は耻とも思はず、其の仲間でも、相應に顔が立つの、立たぬのといふなり。然れば自身に手柄と思ふことも、耻と思ふことも、所々で違ひあり、鐵漿^{カチ}付けの遅いは、蕪子の耻、駕輿町に名の通らぬは仲居の耻なり。博賭^{カチ}うちは牢に入つ

てから顔がよくなる、體にほりものをする伊達もあり。道中に傘をさしかける人の尤な顔、盆のはぐち屋講中、顔見世の手打上下着けた狂言作りて、天晴高慢顔を見れば、耻も面目も自身の心の取りやうで濟むことなり。昔し大石内藏之助を始め、主人の敵を討ちたる義士四十六人、浅野家の家中、幾百人ある中に、忠臣の名をあげしは、僅に是程にて、残りの侍士は、皆逃げたる衆なり。存生計りが末代まで、卑怯者と指さし笑はるゝその耻は、あたまから知れてある事なれども、内藏殿に同心すれば、詰る所が腹切らねばならぬといふ迷惑な事がある故、笑はるゝも合點で逃げたるなり。武士の身の上で、是ほどの耻はなければ、腹の痛さには替へられず、まさか命にかゝつた事には、どの様な耻もかまはぬものなり。大身の歴々さへ其の通り、まして虫同前のわれゝが、立つの立たぬは、一向いらぬ事なり。扱て内藏殿の忠臣のはまれ、日本國中に知らぬものはなければ、唐まではまた

名が聞えず。又天満宮の徳、近頃豊太閤の武名、此等は唐の書物にも載せたれば、唐まで名は聞えたるなり。然れども、天文を知る人に聞けば、此の世界の廣きこと、煖體冷體正體とて、三の分らあり、唐土日本韃靼其の外四方の國々西天竺あたりまでは、正體の中なり。それより遙かに隔たり、唐土日本などを逆さまに見る國あり。是れも正體と云ふ。空には何といふ國があるやら、一向名も知れぬことなり。萬國の圖に載せたる國々は、文字も通すべけれど、其外に名も聞かぬ國か何千何百あるやら知れず、又年月の盡きぬ事を思へば、日本にても神武天皇より二千年三千年までは云ひ傳へ書き傳へし、書物も残るべし。幾萬年の後には書物も残らず、絶えて仕舞ふ事あるべし。世界の廣き、天地の量りなきに比べては、譽られても、耻かいても、花火線香のすゝきから松、なんでもないことなり。我れこの悟りを開いて、とんと耻を捨て、見れば、家藏の主になつたとて、でんゝ虫の様に、

家ともにもあるかれず、借屋人の氣さんじ、寄合にも呼び付けられず。虫の糞はきたないとして身に付けず、布子が破れても、膝がしらすりむいた程、痛みもせず、生れ付て智慧のないと、器量悪しう生れたは、親達の細工のわざ、これ以て我耻にあらず。おんつうかなければ、高味も得喰はず、妾狂ひもならず。せう事なしの山科養生、此世へ出た甲斐に、せめて常命八十まで生きたいと思ふ計り。半二が、現世の安心如斯

と。これは元より戯文ではある、到底四角ばつた、否、眞面目なる君子の言ではない。がしかしこの戯文中に却つて無量の趣味が含まれて居る。人生の目的其れ那邊にあるか。この戯文中に躍如として現はれて居る。讀者宜しく玩味するがよい。又一休の道歌に、彼れの悟境より觀たる人生の目的ともいふべきことを詠んである、

世の中はくうてかせいでねて起きて

扱その後は死ぬるばかりぞ

世の中はへちまの皮のたん袋

そこがぬければ穴へどんぶり

精靈今日出來迎、

雨露直供萬葉樹、

挑得燈明天上月、

松風流水韻經聲、

(一 休)

八風吹馬耳、

三毒空身、

四苦更交到、

壺中別有春、

(垣 山)

蝸縮龍騰自有時、

花開葉落那相支、

毛端了々三千境、

誰向西方勞念思、

(垣 山)

第十章

偉人たるの修養

煩悶の原因……不平の種……我を擴張する所以……學問が全身……
 詩人の美化……人格を偉大ならしめやうと思つたら……自己を
 習ふ……藝術の奥義……忘我……答ふる者は何物……廓然大公……瘦
 我慢にあらず……芥子と須彌……柏樹になりし僧……牛になりし
 畫家……會萬物爲己者……荒れ風……所作によるものは煩ふ心あ
 り……勢に乗ずるものは恃む事あり……浩然の氣に似て非……思
 ふて和をなす者……神武にして殺さず……無我無敵……道は人々
 の脚跟下

自覺の域に達するといふことは我は何かといふことに氣が付いた時だ、
 青年が無暗に煩悶したり、老人が矢鱈に衰毫するのは、人が我を知つて
 呉れぬといふやうなことからだ。學者なんかには之が多い。世の中が何とな
 く寂しいといふのは我と世の中との區劃が分つて來て我の占有してゐる

領分が割合に少ないと氣が付いたからである。

此様な時には得て悲觀に陥り易い。釋迦牟尼佛が生老病死の免れぬこと
 が分り、如何に我の領分の時間が少いかに氣が付いたとき、居ても起つ
 ても居られなんだ。田舎の青年が何様な苦學でもすると云つて飛び出し
 て來るのも我の領分を擴めたい計りだ。彼の拜金主義者が義理や人情を
 顧みない計りか、自分の情慾も忘れる。否、甚しきは其の生命を賭して
 も慾張るのは、我といふものは金であると思つて居るからで、従つて金を
 溜めるのは我を擴張する所以だと考へるからだ。されば金は彼等の生命
 だ。弗箱の中に彼れの五臟六腑がは入てゐる、だから容易に外へ出さな
 い、出せば自分の身を割かれる思ひだ。無理に出せば血が流れる位だ、
 彼れ等は死んでも金さへ残つてゐれば満足なのだ、彼等は生きて居ても
 金がなければ死んだも同じだ。學者が一生懸命に、深夜膏油を絞つて研
 鑽するのは我の領地を學問に認めれたからだ、學問が彼等の全身で、彼等

の全身は學問だ。斯ういふ學問は觸れて見ても温かい。彼れが死んでも其の學問が後へ残れば死なないのだ。殊に詩人は尤も忘我の境に遊ぶものである。美と云ふレンズを透して宇宙を大觀するから。楽しいことも悲しいことも遂に皆美化して仕舞ふ。美化してゐる間は我で、美化して仕舞へば我を外にする、こゝに至ると見るもの聞くものに我れを押擴げて行くから、詩人の我の領分は非常に廣い、しかも尙ほ皆美化して擴げて行く、彼等は始めは美の爲めに我れを忘れる、我れを忘れる位ではまだ、眞美は得られぬ、否、眞の詩人の境に入るには其の美も忘れて來なくてはならぬ。

私の擴充性の大きなものが即ち宇宙で尤も偉なるものである。私の身、私の所有品が我れだと思つてゐる間は劣等だ。智識や、才能が我れだと思つてゐるのは猶其次ぎだ。宇宙其の物を我とするのが最上である。假令へば前二者は小さな庭園を造て、圍屏を結んで他人のと區別して自ら獨り

占めの顔で楽しんでゐる類である。後者は其様なものは造らないで直に戸を開けて四方八面の大景色を眺めて自分の庭園だとしてゐるやうなものだ、即ち千山萬水是れ吾が庭園なりとしてゐる、私の人格を偉大にしようと思つたなら小さい我といふ個性を忘却しなければならぬ。我れに牆壁を築かなければ何處までも擴げてゆかれる、無限大になるのだ、無限大にしようと思つたら、無限大に自ら投入するのだ、其れは道元禪師の垂示にあるが如く

佛道を習ふと云ふは自己を習ふなり。自己を習ふといふは自己を忘るなり、自己を忘るゝといふは萬法に證せらるゝなり。萬法に證せらるゝと云ふは自己の身心及び他己の身心をして脱落ならしむるなりで、これ自己を無限大にするのである。即ち身心を脱落せなければ無限大に擴充することはできないのだ。

劍道は劍ばかりになつて、自分といふものが見えないやうになつて始め

て其奥義に達せられるのである。馬乗りは鞍上に人なく、鞍下に馬なく、鞍だけが行くと見えて。初めて馬術の妙に達するのだ。凡て三昧になる時は神域に入る時である。無關心の状態である、箇の思量底を思量せよ、不思量底如何んが思量せん、曰はく、非思量といふ状態になればよく悟道の域に達することが出来る。忘我といふのは茲である。

我といふものは形體から言つても、壽命から言つても、有限なものだ。智識才能と言つたとて勿論有限だ、もし無限大を得やうと思つたら有限を忘れなければならぬ。永久の生命は此の身では得られないであらうが、しかし宇宙は無始無終といふから無限である、無限の中に居て故意に我と我を有限にし、而して有限に束縛せられて居るのは誰であらう、我は知らぬと云ふだらうか。知ることが出来ぬといふだらうか。或は果して出来ないのだらうか。古人はこれを寶の山に入りて寶を知らぬものだと言つてゐる、既に寶の山に入つて居る以上は何だか直に無限の寶庫の

扉が開きさうに思はれる。

試みに我は何かと一つ眞面目に尋ねて見るが一番早い。人が自分を呼ぶと無意識的に應と答へる、其れは一體何物だらうか。自分が物を考へてゐる其れは何人だらうか。脳髓を解剖して見ても心臓を解剖して見ても、之れが主人だといふものもない。

桜木を打ちわり見れば何もなし

花のたねとは何をいふらん

とはこの消息だ、結局我といふ本體は佛教に所謂無自性不可得と云ふもので、手に取ることも想像することも出来ないものである。が、しかし手に取ることも想像することも出来ないでも、全く無いではない、有るには有るに相違ない、人が呼べば應と答へるではないか。陽明はこれを廓然大公と呼んで居る。けれども、無自性といつた方が面白いだらう。惠林寺の快川國師が、

安禪は必ずしも山水を須ひず、**心頭を滅却すれば火も亦涼し**と、云つて従容として焼け死んだのは、まんざら瘖我慢で言つたのではない。つまり無自性だから無限だ無窮だ、無自性だから花は花で見え、月が月と見える。又花を我にし、月を我にすることが出来るのだ。又我を無限大にも出来れば、無限小にも出来る、所謂大には方所を絶し、細には無間に入ることも出来るのだ。禪の公案に**芥子須彌を容れ、須彌芥子を容るとあるのがこゝの消息である**。即ち守銭奴となりて金を溜める三昧のものは、我は弗箱になり。詩人になれば我れは美になるのだ。茲に禪家に面白い譚がある。

或る行脚僧が夜深山に入つて、路を失つた。所が小巷を見附け出して宿を求めた所、中から一人の老婆が出て来て、僧に向つて云ふには、食物も夜具もないが其れでも宜しくはおとまりなさいと断つた、行脚僧は坐禪して夜を更かすから食物も、寝具もいらぬと云ふので宿を假

りた。ところがこの老婆は人を喰ふ鬼婆々であつたので、夜半とも思ふころ行脚僧が坐つてゐる室へ驅けて来た。僧は庭前の柏樹子といふ禪宗の公案を拈じて坐つて居つた所へ、老婆は、彼所へ驅け、此處を走りて、僧の前やら、後ろやらをきよろ／＼と見まはして、遂に見附け得ないで、そして不審な顔をして獨語りつゝ云ふには、今夜慥かに坊主が此の處へ来た筈だが何處へ往たらう、而かも此の様な所に柏の樹が出来て坊主が居らぬのは變だと怕しい鬼の形相を現して尙ほ驅けすり廻つて、到頭夜明くるまで見附けられなかつた、翌朝になつて彼の柏の樹に見えたのが行脚僧であつたことが分つて、この鬼婆々は遂に發心したと云ふことである。

と、これ箇の行脚僧は我れを柏樹にしたのだ。茲にまた我れを牛にした話がある。怪談諸國物語の中に、

中比宅磨法眼と云ふ繪師あり、常に牛を圖く事を好み、或時筆持ち

ながら居睡りしを物のかけより見れば、宅磨が形牛に變じたり、したしき友なりければ、いつぞやのゆめすがたを告しかば、我他念なく一心に牛を好みて畫く故に、かたちまでも其の物にうつりけるにや、色心不二の理は萬法の至極と聞くにたがはず、はじめに慚愧改悔の心を發し、あけくれ阿彌陀の尊像をゑがきけるに、年へて後ち、ふしたるかたち佛の如く、胸より光明をあらはせることたびくなりしとかや、今に宅磨が彌陀とて、靈佛の一つなり。

右の繪師が一心に牛を畫かうと云ふ三昧に入つたから、遂に物我一枚となつたのだ。これ等は皆無自性なることを證明してゐるではないか。斯る譚は詰らぬ怪談のやうではあるが、修養談としては趣味があるから、此に掲げたのである。

石頭大師が肇論を讀んで、會萬物爲己者、其唯聖人乎との語に逢着して、遂に豁然として省悟して曰く、

聖人無己、靡所不已。

と、因て自己見性の要を歌ふたのが彼の參同契である。

次にこれは有名な荒れ鼠の話して、皆人の知るところであるが、精神修養の参考として後人を益する所が多いと思ふから左に掲ぐることにした。嘗て勝軒といふ、劍術者があつた、其の家に無類の大鼠が居つて、白晝荒れ廻つて始末におへぬ、勝軒いましく腹立ちまぎれに、其の居間も戸障子も緋切り、手飼の猫をして之れを捕へしめやうとしたが、彼の鼠が、猫の面へ飛び掛つて喰ひ附いたので、流石の猫も之れに辟易し、遂に聲を立て、逃げ去つてしまつた。勝軒こりや叶はぬと、今度は近邊にて逸物の名を得た、猫共を數多借り寄せて、彼の一間へ追ひ入れた、ところが鼠は床の隅に蹲まり居て、猫の來るのを待ち構へ猫來らば直に飛び掛り喰ひ附かんずる其の氣色、實にすさまじく見えるので、猫共も皆尻ごみをして進み兼ねて居る。勝軒ますます腹を立

て、自ら木刀を以て打ち殺さんと追ひ廻つたが、其の手元から抜け出で、木刀には當らぬ、たゞ戸障子唐紙などを叩き破るばかりで、鼠は室を飛び廻り、虚を窺つて却て勝軒の面に喰ひ附かんとする氣勢で、其の早きこと宛ら電光石火のやうである。勝軒大汗を流して、僕を呼びて云ふには、これより六七町脇に無類の逸物の古猫が居ると聞くから、早く借りて来いと命じた、僕は走り行いて、彼の猫を連れ寄せて見ると、形はさほど大きくはなく、其の容貌もあまりいかめしいとも見えぬ、又活潑さうにも見えぬけれど、折角借りて来た者であるから、先づ試みに追ひ入れて見よと、少し戸を開けて彼の猫を其の室へ入れて見ると、コハ如何に、不思議にも今まで荒れに荒れたる古鼠もすくみあがつて今までの氣勢は何處へか消え失せたやうすである。乃で古猫は何の造作もなくのそり／＼と歩み寄つて、遂に引き啗へて来たのを見て、勝軒始め衆猫も實に驚嘆して措かなかつた。其の夜件の猫と

もが彼の家に集つて、彼の古猫を上座に請じ、何れも前に跪きてさて云ふには、

我等逸物の名を呼ばれ其の道に修練し、鼠とだにいはい、よし鼬獺なりとも取り挫かんと爪を研ぎ罷り在り候處、未だかゝる強鼠あることを知らず、御身何の術を以てか是れを對治したまふ、願くは惜むことなく公の妙術を傳へ玉へ。

と謹んで申した時に、古猫笑つて云ふには、

何れも若き猫達、随分達者に働きたまへども未だ正道の手筋を聞きたまはざる故に、思の外のことに逢ふて、不覺を取りたまふ。然しながら先各の修行の程を承はらむ。

と尋ねた、ところが其の中に鋭き黒猫が一疋進み出で、

我れ鼠を取るの家に生れ、其の道に心がけ、七尺の屏風を飛び超え、小さき穴をくゞり、子猫の時より早業輕業に至らずと云ふ所なし。

或は眠りて表裏をくれ、或は不意に起つて桁梁を走る鼠と雖も捕へ損じたることなし。然るに今日思の外なる強鼠に出會ひ、一生の後れを取り心外の至りに候ふ

と陳ぶ、古猫の云ふやう、

吁汝の修行する所は所作のみ、故に未だ煩らふ心あることを免れず、古人の所作を教ふるは其の道筋を知らしめんが爲めなり。故に其の所作簡易にして其中に原理を含めり、後世所作を専として免すれば角すると、色々の業を拵へ巧を極め、古人を不足とし、才覺を用ゐ、はては所作比べといふものになり、巧盡きて如何ともする事なし。小人の巧を極め才覺を専らとする者皆斯の如し。才は心の用なりと雖も道に基かず、只巧を専とする時は偽の端となり、先きの才覺却て害となること多し。これを以て顧みて能く工夫すべし

と。次に虎毛の大猫一疋進み出で陳ぶるには、

我れ思ふに武術は氣勢を貴ぶ、故に氣を鍊ること久し、今其氣豁達至剛にして天地に充つるが如し。敵を脚下に踏み先づ勝つて而して後に進む。聲に隨ひ響に應じて鼠を左右に附け、變に應せずと云ふことなし。所作を用ふるに心無くして所作自ら湧き出づ、桁梁を走る鼠は睨み落して之を取る、然るに彼の強鼠來るに形なく往くに迹なし、これ如何なるものぞや

と。古猫のいふ、

汝の修鍊する所はこれ勢に乗じて働くものなり。汝に恃む事ありて然り、善の善なるものにあらず、汝破りて往かんとすれば敵も亦破りて來る。また破るに破られざるものある時は如何。汝蓋て挫かんとすれば敵も亦蓋ふて來る。蓋ふに蓋はれざるものある時は如何。豈に我れのみ剛にして敵皆弱ならんや。豁達至剛にして天地に充つるが如く覺ゆるものは皆氣の象なり。孟子の浩然の氣に似て實は異

なり。彼れは明を載せて剛健なり、此は勢に乗じて剛健なり。故に其用も亦同じからず。江河の常流と一夜の洪水の勢との如し。且つ氣勢に屈せざるものある時は如何。窮鼠却て猫を嚙むと云ふことあり。彼は必ず死に迫りて恃む所なし、生を忘れ欲を忘れ、勝負を必とせず、身を全ふする心なき故に其志金鐵の如く、此の如きものは豈氣勢を以て服すべけんや

と、又灰毛の少し年長けたる猫一疋静かに進みて云ふには、

仰の如く氣は旺なりと雖も象なり。象あるものは微なりと雖も見つべし、我れ心を鍊ること久し、勢をなさず物と争はず、相對して戻らず、彼れ強む時は和して彼れに添ふ、我か術は帷幕を以て磔を受くるが如し。強鼠ありと雖も、我れに敵せんとして據るべき所なし。然るに今日の鼠、勢にて屈せず、和に應せず、來往神の如し、我れまだ此の如き者を見ず

と、古猫乃ち云ふ、

汝の和と云ふものは自然の和に非ず、思ふて和をなすものなり。敵の銳氣を外さんとすれども僅かに念に涉れば敵其氣を知る、心を和すれば氣濁りて情に近し。思ふてなす時は自然の感を塞ぐ、自然の感を塞ぐ時は妙用何れより生せんや。只思ふこともなく、爲すこともなく、感に随つて動くときは我れに象なし、象なきときは天下和に敵すべきものなし。然りと雖も各の修するところ、悉く無用の事なしと云ふべからず。道器一貫の儀なれば所作に至理を含めり、氣は一身の用をなすものなり。其の氣裕達なる時は物に應ずること窮りなく、和する時は力を圖はしめず。金石に當りても能く折るゝことなし。然りと雖も僅に念慮に至れば皆作爲とす、道體の自然にあらず、故に向ふもの心服せずして我れに敵するの心あり。我れ何の術をか用ひんや。唯無心にして自然に應ずるのみ。然りと雖も、道

は極りなし、我が云ふ所を以て至極と思ふべからず、昔我隣郷に猫あり、終日眠り居て氣勢なし、木にて造りたる猫の如し、人其の鼠を取りたるを見ず、然れども彼の猫の到る所近邊に鼠なし。處を替へても然り。我れ行きて其所以を問ふ、彼の猫答へず、答へざるにあらず答ふる所を知らざるなり。是を以て知る、知るものは言はず、言ふものは知らざること。彼の猫は己れを忘れ物を忘れて物なきに歸す。神武にして殺さずと云ふものなり。我れもまた彼れに及ばざること遠し

と、滔々として説き去つた。是に於て勝軒夢の如くに此の言を聞いて大いに感じ、而して古猫を揖して云ふやう、

我劔術を修すること久し、未だ其道を極めず、今宵各々の論辯を聞いて吾が道の極處を得たり。願くは尙其奥義を示し給へ
と。時に古猫の云ふには、

否、我れは獸なり、鼠は我が食なり。我れ何ぞ人の爲すことを知らんや。夫れ劔術は専ら人に勝つことを務むるにあらず。大變に臨みて生死を明かにするの術なり。士たるもの常に此の心を養ひ、其術を修せずんばあるべからず。故に先づ死の理に徹し、此の心偏曲なく、不疑不惑才覺思慮を用ふることなく、心氣和平にして物なく、潭然として常ならば、變に應ずること自在なるべし。此心僅に物ある時は狀あり、狀あるときは敵あり、我れあり、相對して角ふ。此の如きは變化の妙用自在ならず。我心先づ死地に落ち入りて靈妙を失ふ。何ぞ快く立つて明らかに勝負を決せん。假令勝ちたりとも盲勝といふものなり、劔術の本旨にあらず。無物とて頑空を云ふにはあらず、心もと形なし。物を蓄ふべからず、僅に蓄ふる時は氣も亦其處に倚る。此の氣僅に倚る時は融通裕達なること能はず、向ふ所は過にして向はざる所は不及なり。過なるときは氣溢れて止むべか

らず。不及なるときは、倅て用をなさず。共に偏すべからず。我が謂はゆる無物と云ふは不著不倚、敵もなく我れもなく、物來るに隨ふて應じて迹なきのみ。易に曰はく、無思無爲、寂然不動、感而遂通於天下之故也と、此の理を知つて劍術を學ぶ者は道に近し。

勝軒尙ほ問ふて曰はく、
何をか敵なく我なしといふ
と、古猫云ふ、

我あるが故に敵あり、我なければ敵なし、敵と云ふはもと對待の名なり、陰陽水火の類の如し。凡そ形象あるものは必ず對するものあり、我が心に象なければ對するものなし。對するものなきときは角ふものなし、これを敵もなし我もなしといふ。物も我もともに忘れて、潭然として無事なるときは和して一なり、敵の形を破ると雖も、我れ知らず、否な知らざるにあらず、此に念なく感のまゝに働くの

み、此の心の潭然として無事なるときは世界は我が世界なり。是非好悪執滯なきの謂なり。皆心より苦樂得失の境界をなす、天地廣しといへども我心より外に求むべきものなし。古人云ふ、眼裏に塵あり三界窄し、心頭塵なき時は一生寛なり、眼中間々塵沙の入るときは、眼開くこと能はず、元來物なくして明らかなる所へ物を入るゝが故に此の如し、これ心の譬へなり。又曰はく千萬人の敵の中にありて此の形は微塵になるとも、此の心は我が物なり。大敵と雖も、これを如何ともすること能はず。孔子曰はく、匹夫も其志を奪ふべからずと。もし迷ふときは此心却て敵の物となる、我が言ふ所此に止まる、只自ら反うして我れに求むべし。師は其の言を傳へ其の理を曉すのみ。其の眞を得ることは我れに在り。是れを自得と云ふ、以心傳心とも云ふべし、教外別傳ともいふべし。教に背くといふにはあらず、聖人の心法より藝術の末に至るまで自得の所は皆以心傳

心なり、教外別傳なり。教外とは其己にありて自分見ること能はざるを指して知らしむのみ。師より是れを授くるにあらず。教ふるとも安く、教を聞くことも安く、只自己にあるものを慥かに見付けて我が物にすること難し、これを見性と云ふ。悟りとは忘想の夢のさめたるなり。覺と云ふも同じ。かはりたることにはあらず。此れ元より猫に假托して吾人の心術を説きたるもの、熟讀玩味するときは、悟道の榮ともなりて、其の趣味多きのみならず、吾人を裨益すること決して少々ならずである。されど、もし是れを以て、見性悟道の唯一榮りとなさば、これ人にして猫に劣るといふべし。眞の見性や、眞の悟道は、決して語路によりて得べきものではない。所謂以心傳心である。道は人々の脚跟下にある。豈に他に求むるの恐あらんや。然るに此の猫徒らに饒舌を弄す。若し南泉のあるあらば、直ちに斬却し去られたであらうに、可惜許南泉の毒

刃にあはざりしことよ。

命欲日夜に盡く。時に及んで當に努力すべし。世間は明かに無常なり、惑うて冥裡に墮する勿れ。當に學んで、意燈を燃し、自ら鍊りて智慧を求めよ。垢れを離れて、染汚する勿れ、燭を秉りて道地を觀よ。(修行本起經)

身を立つる、高きこと一步にして、方に超越、世に處する、退くこと一步にして、方に安樂。

(醉古堂劍掃)

第十一章

膽力の養成

祖元禪師の垂示……精神を常に澄水の如く……才略智謀を恃む勿れ……平生を始終……勇猛の士氣……心量を擴大にす……時宗の怯懦……怯懦時宗より來る……我に鎌倉男子あり……鈴木正三老人の膽力養成法……家康の二戒……東郷提督

さて、今度は膽力の養成である。膽力は如何にして養成し得べきかと云ふ問題は、人の皆聞かんと欲するところであらう。茲に相模太郎北條時宗に、其の師祖元禪師が垂示したところの大要を提擧するが。

第一 外界の事物に對して全然無頓着なること。外界の事物に對して苟も心馳せ神飛ぶが如きは、之れ尤も人の氣質をして戰々競々たらしむるものなり。此點に於て金剛座上に於ける釋迦の如く、獅子王の歩行する如くなるべし、常に精神を盤石の如く持ち、世界は只我れの外

に偉らきものなしと思ふべし。然れども決して他人を輕蔑し又は他人に無禮を取てすべからず、常に精神坦然として而かも恭敬を忘るべからず。

第二 精神を常に澄水の如く保つべし、精神動搖して外界の事物に頓着すれば必ず其の他を忘却すべし。突然の怖畏は此間より生ず、一方に注意すること深ければ一方の油斷もまた愈々深きなり。努めて平如として精神を臍下丹田に置くべし。

第三 才略智謀に恃む所あるべからず。恐懼病は才略智謀の設計を現出するの原動力なればなり。其の機に當り變に應じて此の心を失はずんば必ず靈妙なる當意即妙の作略智計を生ずべし。宜しく常の時と非常の時と其の心を一にすべし。

(一休和尚の語に平生を臨終と思はゞ、臨終は平生なりと)

第四 勇猛の士氣は能く白刃をも踏むべし、柔弱の肢體は窓隙の風を

も忍ぶ能はず、宜しく常に勇猛の士氣を保持すべし。

第五 見る所狭小なるときは、其眼光見識狭小にして膽量亦自ら狭小なり、須らく常に注意して其の心量を擴大にすべし。

とこれこの五個條は祖元和尙の時宗に垂示して、彼の膽力修養に資したる大意である。時宗は若年のときは士氣甚だ怯懦であつて、後世想像するやうな膽如斗と云ふ人物ではなかつたのである、時宗自ら以て武門の人となる事が出来まいかと常に悔んで居つたほどである、所が數々參禪して作家の痛棒を喫してからは、全く人格が一變した、开して彼れが四百餘州の大元國を驚動せしむる底の大活動をなすやうに至つたのである。時宗一日祖元和尙に問ふて、

人生の憂苦は怯懦を以て最とす、如何にして之れを脱せんか。

和尙曰はく

正に怯懦の來處を閉づべし、

時宗曰はく

怯懦何處よりか來る、

和尙曰はく

時宗より來る、

時宗曰はく

時宗(拙者)怯懦を忌むこと甚し、曷ぞ時宗より來るといふや、

和尙曰はく

試みに明日より時宗(足下自身)を棄却し來れ、果して膽坤大の如くならむ。

時宗曰はく

如何にして時宗(拙者自身)を棄却せむ。

和尙曰はく

一切の念處を絶て、

時宗曰はく

其方法如何、

和尚曰はく

只管打坐靜坐して身心の靜寂を期せよ、

時宗曰はく

俗家事務を免れず、光陰の乏しきを如何せむ。

和尚曰はく

行住坐臥、一切の事務これ最良の修禪道場なり、是れ只管打坐の學場なり。

と、而して前の五個條の如き意味を以て懇々諭示したのである。これ後年に至り、彼れ北條時宗の膽力は如何ほどまでに進んだかといふに、頼襄をして、

蒙古來我不怕、我怕關東之令如山。

と、嘆せしめ、其の三軍を叱咤すること鬼神の如くなりし風貌をまのあたり見るが如く思はしめ、且今に至つて三歳の兒童をして、『何を畏れん、我れに鎌倉男子あり』と謳はしむるの大膽不敵の男となつた。

又徳川の初代に出で、徳川武士の膽力を養成したところの鈴木正三老人が其の膽力の養成方法とも云ふべきものを述べて、

一日示して曰く、後世を願ふと云は、此の糞袋を何とも思はず、打捨つるなり。之を仕習ふ間より別の佛語を知らず。我れは若き時よりこれ計りを仕習ひしなり。先づ千騎萬騎抜きそろへたる備の中へかけ入り、胴腹を撞き抜かれて死に死にして死習ひしに、これはやがて仕習ひて翹入られたり。亦谷底に大蛇口を張り居るに飛び込み、角に取り着き居習ふに、これもやがて仕習ひて角に取りつき居られたり。こゝになにもなき樹の下へ、只落ちて死んで見るになかく、張合なくして飛ばれざるなり。然れども此頃になつて少し飛ばるゝかと思ふなり。

各々も何とも思はず、自由に捨らるゝほど、さまざま工みて此の身を捨て習はるべし。成るほど強き心を用ゐずして叶ふべからず。と、又一日武士に示して曰く、佛法なくして武勇つかはるべからず、血氣の勇は、何ほどよしといふとも、どこぞに臆病なる處あるべし。我も高き樹の上に立つて下を見れば、足振へて臆病出づるなり。佛法修行なくんば、大丈夫の漢と成るべからず。

と、徳川家康は其の未だ天下を一統しない時分には自ら二戒を守つたと云ふ、曰はく忍耐、曰はく大膽不敵と、其の志を得てからは四字を守つた、曰はく油断大敵と。古來の英雄豪傑は皆剛膽にして能く其の奇効を奏したのである、近くは東郷提督の剛膽沈勇にして、よく日本海の大捷を得たことは、衆人の皆知る所であるが、苟くも男子事を成さんと欲するには、先づ膽力の養成を充分になさねばならぬ。然らば其の方法は、如

何すればよいかといへば、先づ初心者是一定の法規の下に坐禪するより別法がない。これには古徳は其れくの法則を設けて學人に授けてあるが、要は道元禪師の坐禪儀か、瑩山禪師の坐禪用心記等によつて工夫するがよい。今一言にしていふならば、正身端坐して、氣を膺下丹田に收め、不思善不思惡、心神清澄するにあり、

と、是れである、先づ論より證據世の臆病患者たるものは、奮發一番直ちに實行して見るがよからう。

青天白日の節義は、暗室屋漏の中より、培成せよ。
旋乾轉坤の經綸は、幽深隱薄の處より、操出せよ。

(醉古堂劍譜)

第十二章

見性と安心

兜率和尚の三關……見性悟道の方法……證道歌……見神、見佛……陸象山の心即理說……佛像が念ヒカ……人々具足箇々圓成……一休の戀煩ひ……カント……認識の主體……無門和尚の偈……達磨と慧可……道元禪師の見性

撥草參玄はたい見性を計る、即今上人の性いづれの處にかあると、これ兜率和尚が學人に接するときに設けたる三關の最初の關であつて、凡そ禪を修し實參實究するものは、第一に踏破せなければならぬ關門である。而して一般の學問の如く、之れを分類し、綜合し、又は辨證等の法を用ふることは異なつて、佛陀が初め菩提樹下に安坐し、沈思冥想して會得せられたるが如くに、修するのである。道元禪師が坐禪儀に塾示して諸縁を放捨し、萬事を休息し、善惡を思はず、是非に管することなく、

專一に工夫せば則ち參禪辨道なり、乃至身心自然に脱落して、本來の面目現前せん

と、説かれたのもこれ見性悟道の方法にして、謂はゆる坐禪である。併し坐禪と云ふことは又しばしば廣義に解釋される、永嘉大師は證道歌に行もまた禪、坐もまた禪、語黙動靜體安然

と謳はれたのを見て知らるのである。何にしても其の精神鞏固にして、八風吹けども動かす天邊の月と云ふやうになればよいのである。所謂心水を動搖せしめぬやうに正身端坐するのが專一だ。然らば茲に見性とは何を意味するかと云ふに、禪では直指人心見性成佛と云つて、一種の特別な意義を有するものとして居るが、吾人は今假りに之れを靈體と名け、佛性といひ、又神といふ(基督教の神にあらず)、所で、近來世に露々として喧すしかつた、見神と云ひ、見佛と云ふのも、禪に見性と云ふのも不可はない。見神見佛と見性とは其の如何なる異同があるかは人々自

己に反省して知るべきである。陸象山曰はく、
 宇宙に塞る一理のみ。學者の學ぶ所以のものは此の理を明らむべきのみ。此の理の大、豈限量あらんや。程明道の謂ゆる天地に憾むるあれば則ち天地より大なる者は此の理なり。(中略)今學者能く心を盡し、性を知る、則ちこれ天を知るなり、心を存し性を養ふ、則ち是れ天に事ふ、人は乃ち天の生む所、性は乃ち天の命するところ
 と、稍々眞に近しと言ふべきも、其の只天の命するところと言ふに至つては、如何とも其の意義があまりに漠然たる憾みがある。少しく霞を隔て、花を見るの感を免れぬ。つまりは性の義は神と見るも、佛と見るも何れに見るも大した相違はないが。たゞ神と言ふと何等かキリストのすがたの如きものが現れたかの如くに思ひ、佛と言へば光明赫耀としたる蓮華臺上の佛像が、金ピカ／＼と現するかのやうに想像するが如きは、甚しき妄想迷信といはねばならぬ。蓋し宗教信者なるものは往々にして

其の熱心のあまり、寧ろ狂熱のあまり精神朦朧として幻影のやうなものを謬り認めることが往々あるさうである。これは心理學上からは幻覺妄覺と云ふので、之れを以て世人の喋々するやうな見神である、見佛であると思ふが如きは、一種の精神病患者と見なければならぬ、實に狂氣の沙汰と謂はねばならぬ。今吾人がこゝに謂ふところの見性といふのを、極めて簡単にいふたならだ、自性を徹見すると云ふほどの義と心得て差支へなからうと思ふ。然らばその自性とは何であるかとならば、即ち靈體と言ふやうなものである。人々具足箇々圓成の本性のことである。人はたゞ此の性の爲めに左右せられて自ら知らざるが如き状態である。之を主人公とも云ひ、趙州和尚は屋裡の眞佛と云はれ、陽明は廓然大公と呼び、一休和尚は之れを本來の面目坊と呼んだが。即ち宇宙の本體と相通するものであつて。道元禪師が身心自然に脱落して本來の面目現前すとは自性を徹見したといふに同じことである。一休和尚の歌に

本來の面目坊の立ち

一目みしより戀とこそなれ

我れのみか釋迦も達磨もあらかんも

此の君ゆるに身をやつしけり

といったのも皆この自性徹見即ち見性のために積善累徳せしをいふたのである。此の君とは即ち性のことである。カントの所謂「物其自」と言ふものも同じである。吾人は記憶、想像、觀念等を去つて自己心中に之れを認めなければならぬ。誤つて精神作用などを認めてはならぬ、精神の本體を認むべきである。作用は如何に追求するも矢張り作用に過ぎぬ、本體ではない。乃ち吾人が凡て事物を認識するところの、この認識の主體を徹見せんと欲したならそれを如何になすべきかといふに、まづ靜坐瞑想して自己に返らなければ不可能である、能く自己に反つて、頭腦より脚尾に至るまで搜索して見るがよい、見よ、吾人は屢々快樂を求め、

苦痛を去らうとして居るではないか、知らず果して何物が快樂を求め苦痛を去らうと勉めるのであらうか、もし能く其の何物なるかを發見し得たならば、これが爲めに自から使役せられて、一生己れに奉公するが如き愚を演ぜざるに至るのである。無門和尚の偈に

學道之人不識眞、只爲從前認識神、

無量劫來生死本、癡人喚作本來人、

と言へるのも、これ自性徹見せず、これに使役せられ、これに奉公する癡態をいふたのだ、されども一旦廓然として自性徹見して見れば即ち盜人を捕へて見れば我が子なりである。花を見て美麗であると思ふものは何物ぞ、生活難のため、情慾のため、又は精神上の不如意のために、煩悶し、慎惱するものは畢竟これ何物であらうか、支那禪宗の二祖神光慧可が初祖菩提達磨に問うて曰はく、
我が心安んせず、請ふ師安んせよ

達磨曰はく

心を將ち來れ汝が爲めに安んせむ

神光や、久うして曰はく、

心を求むるに遂に不可得

達磨乃ち曰はく、

我れ汝が爲に心を安んせしめ了んぬ

と。又この心不可得の意を金剛經に

應無所住、而生其心

また過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得。とも云ふてあるのである。人は往々影も象もなき物の爲めに精神を惱ますとが少くない、野蠻人は己の影法師を見て、實物だと信じて隨逐するさうだが、其れよりまだ一層の愚と謂はざるを得ぬ、これ吾人が見性の必要なる所以を説く譯である。されど吾人はあまり多く説明することを好まぬ、見性は説

明的なものではない、要は各自が自ら己れに反りて實參實究するにある。次には自性を識得すれば生死を脱す、あはや瞑せずんば已まざるとき如何に脱せんとするや、これ第二關である。之れを打破することを得ば、第三關は、生死を脱し得ば去處を知る。今や瞑し了せんとするとき何處にか去ると。又道元禪師が見性と云ふことを垂示して、

見性とは佛性なり、萬法の實相なり。衆生の心性是れなり。此の性は有情非情に渡り、凡夫聖賢に普くして、都で住す所なし。又此性は色にあらず、有にあらず、無にあらず、住に非ず、明に非ず、無明に非ず、煩惱に非ず、菩提に非ず、全く實相なし、之を覺るを見性と名づくるなり。

と説いた。達磨大師が直指人心見性成佛と云はれたのもこゝである。

第十三章

静中の真機

大活動は必ず大静止より来る……近所に失火あれば……尋常の風流漢と同一視すべからず……古池や……空界無物の状態……水の音のみを知る……歸家釋坐……婆子燒庵

心水の波浪を沈静ならしめねば真如の明月が印せぬことは前にも説いた、吾人の心水は四大假和合の器に入つて居るから、此の心水の静止を得るやう努力せねばならぬ。道途に迷ふたならば先づ立ち止まつて考ふるがよい十字街頭に立つて方角が分らなかつた時に濫りに進むのは不得策だ、一步の違ひが千里萬里の差を生ずる、精神が激昂した時には人に接せず、蒲團をかぶつて臥てゐるがよい。凡そ精神は身體と同じく、一定の限りがある、妄りに過勞せば必ず疲勞を來し、加之ならず生命を短縮せしむる恐れがある。殊に憤怒の如き、散亂妄想の如き、害毒之れより甚しき

はないのである。凡そ吾人が大事業をなし、大成功を遂げやうと思ふたならば非常の準備がなければならぬ。であるから大なる活動は必ず大なる静止から來るのだ。殊に吾人が或る大問題を考量し、之れが解決をなさうとするには、一たびはあらゆる精神の作用を静止せしむべしである。大地震の將に來やうとするときには、其の瞬間に於て天地殆んど沈黙するかの如き感じがあるではないか。若し吾人の精神が澄清し來つたならば、考案するところ總て明鏡臺にあたつて物の正確に映するやうなものである。己れが近隣に火事が發らば先づ喫煙三服して、而して後に取り方附けに着手すべきである。古人がいふてある、若し近所に失火あらば、其の類焼するや否やを豫知する爲めに、先づ己が家の大黒柱に寄つて觸れて見よ、若し柱熱せば類焼すべく、冷かなれば類焼を免れむと。事實果してさうであるかドウかは保證出來ぬが、只其の心を落付かせる爲め的手段としてはよいと思ふ。これ輕舉妄動の三時間は、沈着正動の一時

間にも劣る所以である。人間萬事凡て此の心がけを以て行動したならば、十に八九は萬事に失策がないであらう。芭蕉の「古池や蛙とび込む水の音」と云ふ句は、俳句として實に趣味津津たりだ、元より只有のまゝを寫したものに過ぎないが、此の有のまゝなる實景をよんだのが趣味ありとして斯界に取りはやされた譯であらう。何もこれを強ひて禪に引き込んで解釋しなくてもよいのであるが、兎に角芭蕉は確かに禪味を嘗めて一分の解脱を得て居つた。彼れが佛頂禪師に參じて印可を得たと云ふ話しは諸書にも見えて居る。されば彼れには單に花鳥風月に酔へる尋常一様の風流漢と同一視すべからざる偉大な點があつた、此の句は芭蕉が如何なる人物で、如何なる意味から咏んだかを問ふ必要はない。只古池の句を吾人の禪意からして解釋を試みて見やうと思ふのだ。何と實に少からぬ趣味を含んで居るではないか。先づ「古池や」の初五文字からして何となく閑寂の趣きが充ちて居るではないか、實

に天地悉く静止の當體にあるではないか、若し芭蕉が古池やと吟じ出さなかつたならば、その古池は未來永劫の末まで恐らく何人の注意をも惹かず終つたであらう。然し古池は太古以來、湛然として彼處に存在して居つたのである。これ混沌たる空界無物の状態にして天地未だ剖判しない状態である。天地未だ剖判しない状態は曾て過去何萬何千年なるか、この何萬何千年以來寂然として動せざる状態が即ち、古池やの眞趣である。換言すれば、闇の夜に鳴かぬ鳥の状態であつて、生れぬ先の父母の状態である。忽然として蛙飛び込む水の音にて天地開け萬物展開し、千波萬浪一時に起りて、我れも亦俄然として我れに歸り來るのである。即ち古池やは大寂静止の状態であつて、「蛙飛び込む水の音」は生起活動の眞趣である。古池は蛙飛び込み後も依然として古池であるやうに、生れぬ先の父母の戀しきことは生れし後と雖も異なることはない、我の「古池や」の状態は即ち我の空界無物の状態、本來無一物の状態である。本來

無一物の状態は即ち億々萬劫光明莊嚴の靈體ではないか。人皆蛙飛び込む水の音のみを知るも、古池やを知らぬのである。佛陀はこれを長者の窮子とて、自家の坐床を忘却して漫りに他國の塵境に漂浪するを呵して、速に歸家穩坐せよと云ふた。歸家穩坐とは夫れ唯靜止に歸ることである。只この靜止や事物に三昧となる時のみ思はず認めるとがある。無念無想に入るとき木の葉の落つるが如きを感じることもある。無念無想はよく心をして明鏡止水の如くならしむ、即ち大事を發明せしむるのである。文殊無着問答頌に曰く、

洪浪波心看水勢

一輪明月印寒潭

と。されど人多くは消極的の靜止に住著して遂に生氣なき、活機なき、枯木禪に陥つて仕舞ふのである。枯木寒巖に倚つて三冬暖氣なしとて、枯木死灰の如きを以て得たりと思ふて居るのである。これは二乘聲聞の

禪にも及ばぬ、天魔波旬の業にも及ばぬ禪魔に陥るのである。この靜止の病患、槁木の禪を打破したるものに婆子燒庵てふ公案がある。

昔し支那に一人の老婆があつた、中々の傑物であつたと見えて、一人の禪僧を庵主として二十年間供養して居つた、そして常に妙齡の女子をして食を送つて給侍せしめてゐたのである。一日老婆は庵主の修行を試みやうとして、女子をして庵主を抱擁して、正當恁麼の時如何と問はしめた、ところが庵主はそれとは知らずに正直に答へて、枯木寒巖に倚つて三冬暖氣なしと云つた、女子は乃ち此の事を老婆に復命すると。之れを聞いて老婆は憮然として云ふには、我二十年來只此の俗淡を供養したりと。遂に庵主を追放して庵を燒却して仕舞つた。

これ固より假設の話であらうが、能く咀嚼して此の病患に罹らぬやう注意するがよからう。

第十四章

禪と學藝の修養

法華轉、轉法華……死學問……學問の束縛……自己を讀む……活學の法……活眼を打開して活書を讀む……不立文字……故紙堆裡の蠶魚……啞滴糟淡……一個の緊要極

禪語に法華轉、轉法華といふことがある、即ち迷ふものは法華に轉せられ、悟るものは法華を轉すといふことである。如何に學問しても學問に轉せられ學問に吞却せられては死學問に終つてしまふ。かゝる學者は、一生學問しても學問を活用することが出来ぬ、識見を擴むることも出来ぬ、無論人格を高むることも出来ぬのである。吾れは學問したと言ふても、其の學問した部分は、皆吾れの客觀的部分に堆積し、主觀的部分の眞の我れは依然として舊阿蒙である。書庫といはれ、蠶魚といはれて、あつたら生涯を碌々として終るのである。彼の試験に及第せんが爲めの

學問、パンを得んが爲めの學問、虚榮を得んが爲めの學問などは皆この範圍に屬する死學問である。即ち學問の爲めに使役せらるゝ奴隸である、學問に轉せらるゝ死學者である。しかし、其は尙ほ恕すべしとするも、試験、糊口、虚榮の奴隸として驅使せられ、其の奔命に一生を疲らすのである。かゝる輩は學問したと云ふても、吾人から見れば依然として學問せざる人と同様である。其の人格たるや甚だ卑く、其の識見たるや甚だ狭く、唯書を讀んだと云ふばかりで、鸚鵡の如く、猩々の如きのみだ、是れ等を學問の束縛を脱せざる法華轉と云ふのである。苟くも活ける學問をしやうと思ふたら、學問を使役し、學問を轉じなければならぬ。即ち我れは知見を研く爲めに學問するのである、人格を高尙にする爲めに學問するのである、識見を擴充する爲めに學問するのである、社會に貢獻する爲めに學問するのである、否、道を得んが爲めに學問するのであると此の如く服膺して讀書するのだ。禪僧の經論祖錄に

對する考へを看るにみな斯の見地に立つて讀破するのであつて、決して經論を讀み、開して祖録を解釋しやうとして祖録を讀むのではない。自己を讀み、自己を解釋する爲めに讀むのである、それであるから古往今來、經論を活用すること禪僧の如く自由自在にやるものは餘宗にない。自己を讀むとは宇宙を讀むのである、社會を讀むのである、否、人生を讀むのである。開は自他を區別せぬからである。讀書の時は書籍の外に自己を見ず、書籍と自己と一緒になるのだ。鹿を逐ふものは山を見ずとはこの消息である、總て物の研究に於ては皆さうなければならぬ。是れ即ち三昧に入るので、三昧に住すれば其の物と一致するのだ、其の物になりきることを三昧と云ひ、正受と云ふのである。だから學問する時は學問になりきつて、自己を認めないのである、これ學問に吞まれざる法である。學問を體得する法である。又學問を轉ずる活學問と云ふのである。學問の束縛を脱したる活學者である。而して其の法や恰かも野猪

を御するが如きものだ。野猪を御し、野猪を驅使しやうとするものは、彼の尾後について逐ふやうではとても駄目だ。蔘直に奮進して彼れの背に乗りうつり、彼れを自由にすることを得るやうになる、これ與へて取るの法である。之れを禪から云へば、則ち小我を棄て、大我と冥合一致するのである。己れの生命を棄て、かゝれば何物も恐怖するものはない、如何なる大事も成らざることはないのだ、乃ち學問を體得せんとする者は、速に學問に我れを藏し、學問を我れとせなければならぬ。これ學問によつて自由を得、學問によつて活智を啓發し、而して學海に游泳するの秘訣である。されば必ずしも試験に成績が優等でなくてもよい、落第することも敢て厭ふべきではない。學問の目的は決してかゝる卑屈な、けち臭いものではないからである。

斯くの如くにして學問を體得すれば識見自ら長じ、眼界自ら擴まり、自ら道と會通し、精神自ら安詳にして所謂偉大なる人物となることを得る

のである。これ學問に拘々たらず、齷齪たらずして、其の効果甚だ偉大なる所以である。然し學問を以て我れとすること能はざるものは、終日終夜、學問の後を逐うて、文字に拘泥し、言語に執着し、學問に束縛せられ、學問に驅使せられて得るところはない。これ學問は彼れにあり外界にあり、客観となるからである。學問を我が領内とするに於て、始めて學問を轉じ、學問の束縛を脱して悟道の域に達し得らるゝのである。こゝに於てか、一寸學べば、一寸我れにあり、一尺學べば、一尺我れとなり。一丈學べば一丈我れとなり、乃至百千丈學べば、百千丈則ち我れとなる、山河大地森羅萬象悉くこれ活學活書となる、これをこれ活眼を打開して活書を讀むといふのだ。即ち解脱悟道者の學問法である、讀書法である。

世の多くの禪者は、口に不立文字を唱へて、頻りに彼の教相家を罵倒し、彼れは教者法師である、文字の奴隷であると嘔々するが、自らは古人の

公案古則を無上の經典として、それ以外に一步も出づることも出来ぬではないか。臨濟ではこれを故紙推裡の蠶魚と呵し、黃蘗ではこれを唾酒糟の漢と叱責して居る。これこの漢は皆古則公案に轉せられて、可惜許自ら古則公案を轉じ得ない癡漢である。殊に刻下此二十世紀の社會に立つて所謂祖録を提唱すと稱する宗師家の言ふ所はたゞ數百年、否數千有餘年の古代に録したるもの其まゝを文字に依つて婆説するのみで、些の活機ある、元氣ある、否應物現形、所々身所々現の活作活用のないのは、皆これ法に轉せらるゝの罪で、我れ法を轉する底の作家の漢なきは豈惜むべきことではないか。一千七百の公案も遂にこれ一箇の繁驢概となつて仕舞うた。可惜許々々々。

第十

禪機と處世

交際の秘訣……輕薄之より過ぎたるはなし……事を爲すの秘傳……障子と圓……養子の悟道……舊見を打破せよ、全身を放下せよ

古人曰はく、『交際の秘訣は己れを空うするにあり、他を容るゝにあり』と、小我を立して、他を排し、偏狹の念を以て、他を律するが如きは、交りを親うする所以でない。先輩に依頼して其の事即坐に成らざれば則ち再び其の門を潜らぬなどは、輕薄これより過ぎたるはない。青年にして事を先輩に頼まんとならば、一再訪うて成らざる時は、敢て之を三四せよ、而して尙ほ成らざる時は更に數四、數五、決して勞を惜むべからず。忍耐は如何なる時も遂に事を爲すの秘傳である。さる處に一人の養子があつた、世間の習ひとて、養父母との間柄、兎角

折合ひがつかぬ、實に小糲三合持つたら養子に行くなどの諺が、眞理であるをつつくゝ感心して居つた。ある日大工が来て内椽の障子を箝めやうとしたが、上も下も歪んで居つて障子が容易にはまらぬ、いろゝと工夫はしたがなかく箝るやうにも見えなかつたので、ドウして彼れはあの障子を箝めるであらうと、養子どのがよく注意して見て居ると、大工は流石に考へた、其の歪んで居る上下の方は削らないで、却つてまつすぐな障子の方を、一寸箝めて見ては上を削り、又箝めて見ては下を削りして、遂には全く歪んで居る圓へことりとうまくはめて仕舞つた、養子がつくゝと此の有様を見て居つたが、掌を拍つて吾れ悟れりと叫んで、其後はよく養父母との折合ひをつけたと云ふ話がある。さてこの養子は一體如何に悟つたのであらう。蓋し圓は元來家に造り附けのものである、障子は新に外より來つたものに過ぎない、であるから今外來の障子を以て圓を如何ともすることもできぬのである、圓のまゝに準じ

て、新來の障子を添削するより外に詮術がないと悟つたのが、即ち斯の養子の悟道である、解脱である。世間には往々にして斯くの如きことがしばしばある。この複雑なる社會に處し多くの人と調和し行くには何と味ひのある話柄ではないか、禪に舊見を打破せよ、全身を放下せよと云ふのも茲の消息である。

貨財を積むの心を以て、學問を積めよ、
功名を求むる念を以て、道徳を求めよ、
妻子を愛する心を以て、父母を愛せよ、
爵位を保つのを以て、國家を保てよ、

(醉古堂劍掃)

第十六章

禪機の妙用

政治家たる資格……一國を呑んで治める……偉大なる考想……人
事を見ること蚊虻の如く……始末に困る人……裁群機於量外

或人政事家たるの資格を語つて曰く、

政事家の本領は大節を立つるにあり。大本を固むるにあり、而して其の資格三あり、曰はく、天下を経綸するの才識、天下を籠蓋するの膽略、天下を包括するの徳量こなれり

と。又鈴木正三老人の垂示に

一國を呑んで治めるが肝要である。心がぐづついてはならぬ。如何にも心をはッしと用ひ、慈悲を以て仕置し、又づんと打ち上り、人々の性を能く見附けて、下知せねばならず。大略は主人の心が狭くして、人の性を見分け得ず、我が機と合はざる事多く、我が機が往いて、彼

が機と戦ふのである。これ、かつたいと棒打するものである。總て政治をするに、物の上となりて聞かねばならぬ。必ず物の下となりて、彼れが言ひ分に追付いて捌くときは、政道正しからぬものである。心をよく用ひて、一國を引き敷いて下知するが第一じやと、云ふてある。

蓋し心を虚しく持することが其の根本要素であらう。彼の一休和尚が、平生を臨終と思は、臨終は平生なりと言ふた如く、平生に能く膽力を養つておかなければ役に立たぬ、所謂度胸が据らなければならぬのである。度胸が据らず、臆病虫につかれて居るものは眼識が透徹せぬ、眼識が透徹せぬと遠く見ることが出来ぬ、利害得失を洞察することが出来ぬ、かゝる人は到底政治家たるの資格がない。嘗に政治家のみならんやだ、人は平生こそ落ちつき拂つて居れ、一旦急難に迫つた場合には、胸はドキつき、腰は据らず、脚はふるつて、周章狼狽せざるもの殆んど稀れで

ある。是れ平生より偉大なる考想を養はざるに由る故だ。例へば田舎より突然東京に出て來た時に、銀座の通りなぞを見たならば、或は驚嘆する外はないであらう、されども、若し佛國の巴里なぞに遊んで歸朝したものの眼には、決して東京位の繁華には驚かないやうなわけで。苟も十億の民を左右しつゝある大政事家は、僅に五千萬人位を制御する位のこととは朝飯前の御茶ノコでなければならぬ。若し夫れ宇宙大の眼界に、豁然契通するところあらば、人事を見ること宛がら蚊虻の如きものであらう。

然らば如何にしてかゝる資格を養成し、かゝる大事を成し遂ぐることを得るであらうか、他なし、解脱を得よ、これである。西郷南洲の遺訓に曰く、

命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり、此始末に困まる人ならでは 艱難を共にして、國家の大業は、成

し得られぬなり

と、然りこの始末におへぬやつこそ眞の豪傑、眞の偉人、眞の大政治家と云ふべきである、而して事業家としての解脱者として眞に禪の妙用を解したるものと謂ふのであらう。

禪偈に

列萬象於目前
裁群機於量外

と、而して野禿もまた贅して曰はんとす。

眼空寰宇、氣吞五洲、

第十七章

生死透脱の一路

決死の覺悟……いざ死ぬとなれば……山鹿衆行の覺悟……日本道徳の根幹……義は泰山より重し……殿頭の感……徒らに死ぬなどは……痛いめに遣はなければ眞實の修行は出来ない……自分の價值を重んずる

決死の覺悟は大丈夫として忘るべからざる要素である。日本人の強いと言はれるところはこゝにあるのだ。我邦の武士道といふことを西洋人の或る者は、「腹切りズム」だと言うたさうであるが、たしかに一面の眞理はある。人生の解決が出来ぬの、世間が苦しいのと言ふときに、まづ此の覺悟を試みて見るがよからう。平生は誰れでも口には色々なことを言ふが、いざ死ぬとなれば、ドンな者でも眞面目になる。虚偽はない、信實である。武士道と云ふものゝ其の根柢は此處にあるのだ。されば何時で

も、男子として我が家の圃を跨いだならば、生命は知れぬものと思へといふ教訓は、深く脳裡に沁み込んで居たのである。だから家内のものは亭主の家出は、何時でも死途の旅地に上るの門途と心得て居つた位である。彼れ山鹿素行が幕府の諱忌に觸れて、突然呼び出された、そして理も非も言はせず流罪に處せられ、播州姫路の赤穂の城主淺野家へ行くことゝ決定した時に幕吏が素行に對つて、『何か家内へ言ひ送ることは無いか』と問ふた、其の時素行の言ふには、『拙者は常に家内のものに言ひきかせて置く、武士たるものが荷くも家を出づるときは再び生きて還らぬ覺悟でなければならぬ、其の日くの言行は皆な遺言のつもりでなければならぬ、だから今はとなつたとて別に言ひ送るとはしない』と言つた。これは山鹿素行ばかりではない、荷くも心ある武士は皆斯ふであつたのである。

或は日本人の短氣なのは斯ういふところが原因だとか、日本人は思ひ切

りが好い代りに、永久的の事業が出来ぬといふやうな批評もないではない。しかしそれは話が違ふ。日本國民は義を重んずる民族である、乃て君のため、國のために死ぬのが忠義となると言ふことが大なる道徳で、そして又大いに趣味ある所であつたのだ、否、これがソモソモ日本道徳の根幹となつて居るのである、如何なる際にも如何なる場合にもこの決死の覺悟があつて、如何なる難關をも打破し、如何なる大事も出来るのである。

現今の兵制は、規律を重んずると言ふことが主である、イヤ昔とてもこれはかはらぬが、規律の前には自分の生命などは眼中に置かぬ。平生から決死の覺悟であるのだ。尤も西洋にも随分ある。彼の英國の或る軍艦が(ノルマントン號?)坐礁したとき、乗組の水兵は甲板上で「右へ習へ」とやつたまゝ、列を崩さず沈没したといふ話などもある、近年日露戦争にも、このやうな逸話が澤山あつたではないか、だが世界各國の中でも比較的

に日本人が此の念が強固である。或程度までは殆んど日本人の専賣といつてもよい位だ、日本兵の強かつた所以は、此の規律の前には命をも顧みぬ、決死の覺悟で此規律に従ふといふところにある。この覺悟が取りもなほさず義は泰山よりも重しと云ふ觀念から出て來るのである。單に戦争ばかりには限らぬ。凡ての事業も此の覺悟で進行して行つたならば、凡ての方面に全勝を占むるに至るのである。宗教に文學に、美術に、工藝に、殖産に、商業に、皆此の決心でなければならぬ。惜哉今や此の決死の覺悟は、たゞ軍人によつてのみ操守せらるゝことゝなつた。これ我邦が戦争には勝つて其の他のものに於いて往々敗北を取る所以である。『平生を臨終と思へば、臨終は平生なりと言つた一休和尚の語は、凡ての人事に應用の出来る金言である。佛陀などの發心出家は全くこの決死の覺悟であつた。其れから弟子たちに示誨した語にも毎にこの決死の覺悟をせよと言つてゐる。實際決死の覺悟であつたら、事として成就せぬと

いふことではない筈である。又この覺悟を定めてこそ、始めて宇宙の眞理も分るのである。人は口には立派なことばかり言つて居るが、それは極めて皮相なことに過ぎない場合が多い、決死の覺悟が却／＼容易に出来るものではないのだ。此點に於ては華嚴の瀧へ飛び込んだ青年などは感心なものだ。がしかし、惜しいことには彼れは人生の解決がつかずに煩悶しつゝ、迷ひつゝ死んだ。彼れは永久に巖頭の感を抱いて居ることであらう。朝に道を聞いて、夕に死すとも可なりと云ふことを知らなかつた、彼れは無暗に死を輕んじた。これ犬死である。不惜身命といふことはたゞ徒らに死ねといふことゝは違ふのである。單に死を決するといふことを貴しとしたならば、男女痴情の果ての情死をも、放蕩の結果進退谷まつて自殺する者をも皆な賞賛しなければならぬ、これ大いなる間違である、只徒らに死ぬなどは決して貴ぶべきことではない、其の貴ぶ所以は、其の死ぬる動機の價值によつて定るのである。

古來禪僧が僧堂にあつて坐禪するとき、警策といふ四尺ばかりの棒で打ッ叩かれるのである。黄檗の六十棒など、云ふのや、雲門の棒など、いふのは此のことである。門外漢から見たらば随分亂暴なやうではあるが、これは修行の禪僧をして決死の覺悟をさせる一の手段に過ぎぬのだ、ドウしても身に泌み込むほどの痛いめに遭はなければ眞實の修行は出來ないからである、古人は虎穴に入らざれば以て虎兒を得がたしといひ、又虎口裡に身を横たふなど、云ふのは皆決死の覺悟で修行する消息をいふたのである。平生國家がドウのイヤ政黨がドウであるの、何の、かのと蝸牛角上の争をして居るが、イザ他國と開戦といふ段になると、國民が皆一致して眞面目になる、これは舉國一致して決死の覺悟となつた當體である。

春が來れば爛漫として開いて、滿都の人士をして殆んど狂せしめんとした櫻の花も時來つて潔く散るのは、必ずしも思ひ切りよく、散るといふ

ことを賞美するわけではない。これは純粹の美を大切にする所に價值がある。絶美といふ所だけを見せて、打ち萎れた醜態を見せぬ、つまり美を著しく見せる、美を重んずるとも言ふ點を感じるのだ。人が生きては居られないと言ふのは、それだけ自分の價值を重んずるのである。死ぬのを重んずるのではない。

曠ハシ是心中ハシ火ハシ能燒ハシ功德林ハシ 欲ハシ行菩薩道ハシ

忍辱護ハシ眞心ハシ

吾心似ハシ秋月ハシ 碧潭清皎潔ハシ 無物堪ハシ比倫ハシ

教ハシ我如何說ハシ

盡日尋春不見春ハシ 芒鞋踏遍亂頭雲ハシ

歸來笑撚梅花嗅ハシ 春在枝頭已十分ハシ

(寒山詩)

(寒山詩)

(悟道詩)

第十八章

樂天の眞境

諦らめ主義……甚だ高尙な哲理……何事も因縁……依頼心は煩悶の基……若しや死ななければ……壽夭は我がまゝ……愚なる人は深く物を恐む……頗回も不幸なりき……死期が分つたら大變……諸行無常……現代の青年……眞理は變るものではない……死生は汝の所爲

諦らめ主義といふと、何だか消極的で、意氣地が無ささうに聞こえるが、これは本能に支配されて己れに克つことの出来ぬ、動物的なニイチエ主義などの我儘ものが罵つた言葉で、諦らめるといふことは、甚だ高尙な哲理である。これは大豪傑の勇氣がなくては出来ぬことだ。大奮闘して勝利を得たものでなければ不可能である。生死を明らめるなども其の一で、人生を悟るといふ上には斯ういふ作用も必要であるのだ。古來武士

の奥方などは凡てこの諦らめるといふとをよくした、だから突然の災厄が起つて来て、夫の不在中に非常な艱難に遭遇しても、平生何事も因縁だと諦らめがついて居るから、大なる忍耐といふとは此の間に出来て居る。大なる忍耐者は世界の最も偉大なるものである。達人は能く瞬間に物を諦らめる、腹を立てぬ、心配をせぬ、物をほしがらぬ、即ち自分に克つのである。自分に克ちさへすれば人生に何の心配もない、何の煩悶もない。何の矛盾もない、何の撞着もない、眞に洒々落落として樂天的生活が遂げ得らるゝのである。すべて決死の覺悟をしたならば、如何なるとでも諦らめられる。何事も諦らめられぬやうな者は小人愚者のドン底である。誰やらの歌にかういふのがあつた。

野邊に花なき世をおもへ、
花に露なき世をおもへ、
人に笑みなき世をおもへ、

愛に絶えたる世をおもへ、

と、これ無論言ひつくしては居らぬが、多少諦らめの参考になるであらう。

人はあまり依頼心があるからそれだけ苦痛が多いのだ、といつて何も孤立を守るにも及ばない。たゞ柳の風をうけるやうに、些しも心を動かさず、サラ／＼と世を渡るやうになればまづよいのだ。常に坦然悠然として人生に處することが出来れば可なりだ。人はあまり生命を頼みすぎるから苦痛が多いのだ、百年生きたいと思ふところへ、四十で病氣でもすると若しや死ななければよいがと心配をする、心配を仕すぎるから病がだん／＼重くなる、あまり壽命を頼みとして煩悶するのは愚かである、貝原益軒が『長命ならんも、短命ならんも、我が心のまゝなり』と云ふたが、つまり精神を煩勞するのは物に依頼することが多いからだ。他人が我れを歡待して呉れるだらうと豫期し、彼れは我れを尊敬するだらうと期

待するから、それがその豫望通り、期待するやうにゆかぬと直ちに立腹する、あゝ人生はつまらぬなどいふ氣になる。兼好法師の語に茲の消息を喝破しある、曰く、

萬の事は憑むべからず、愚なる人は深く物を憑む故に、怨み怒ることあり。藝ありとて憑むべからず、剛きもの先づ滅ぶ。財多しとて憑むべからず、時の間に失ひ易し。才ありとて憑むべからず、孔子も時に遇はず。徳ありとて憑むべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも憑むべからず、誅を受くること速なり。奴婢従へりと憑むべからず、背き走ることあり。人の志をも憑むべからず、必ず變ず。約をも憑むべからず、信あること少し。身をも人をも憑まざれば、是なる時(順境)は喜び、非なるとき(逆境)は怨みず。左右廣ければ障らず。前後遠ければ塞がらず。狭きときは挫け砕く。心を用ゐること少しきにして、嚴しき時は、物に逆ひ、争いて毀る。寛くして柔なる時は、一毛も損せず。

人は天地の靈なり。天地は限る所なし。人の生は何ぞ異ならん。寛大にして窮らざる時は、喜怒これに障らずして、物の爲に煩はず。此語はなか／＼趣味がある。宜しく玩味すべしだ。

全體吾々は何時死ぬか分らぬと思ふと、世の中に楽しいことが無くなるやうに思ふかも知れぬが、それは至つて狭い考へである。何時死ぬか分らぬから面白いのだ、それがハツキリと其の死期が分かつたら大變ではないか、一向趣味がなくなつてしまふわけである。吾人は何時死ぬか分らぬから、詰らぬことを考へない、一時の快樂を求めることをせぬ、永久の快樂を求めるやうにもなるし、一刻といへども無駄に費さぬやうにもなる。日々の生命をなほざりにせず、私に費さぬやうに心掛るのである。また同じ遊戯にしても下らぬことをせぬやうになる。従つて日常の些細なことにも心を動さない、そして人生を解脱しやうと努める。悟道するやうに修養する。従つてだん／＼眞正の趣味が分るやうになるのだ。

佛陀などが諸行無常と言つたのは、たしかに深い趣味のある言葉である。實際これを経験して見たならば、決して吾人を欺いて居らぬことが分るのである。

現代の青年は往々詰らぬことをクヨク／＼して煩悶して居るやうである。が、つまりこの決死の覺悟やら、諦らめると云ふ修養が積まんからのことだ。昔しの武士などはこの修養が積んで居たから細事にクヨク／＼しない。實際日本人は昔から斯る簡明直截な教條の下に養はれて來たのである、恐らく世界が如何程進歩したとて、眞理は決して變るものではない。堅固な、有効な、趣味ある教訓に依つて修養するのは、日本人のやうな直截的、明敏性の國民には尤も能く適するものである。今日までの歐米人などに、到底悟道とか、解脱とかいふことが出來たためしはない。要するに歐米の思想界には東洋人から見ると。往々馬鹿げてゐることが多い、殊に宗教などは其の幼稚な考に驚かざるを得ないことが屢々ある。

然しこれは達觀的な眼光で見ないと分らぬのだ。
前からだん／＼述べた如く、實行といふことはなかく、理論のやうには
行かぬ。だから吾人は理論を闘はず爲めには説かぬのである。高論拙行
の人は随分現代に多いやうであるから、吾人は切に此等の人に實行して
見ることを勸奨するのだ。語あり曰く、

死生は汝の所爲

汝自身を知れば

汝は死生を脱す

死生を脱すれば

汝に死生なし

死生なきが故に

汝は不死ニルવીナ 不死なるが故に 汝は自由

人生は愉しき哉

第十九章 絶對の大自在境

矛盾撞着……大悟底の境界……七十にして規を踰えず……水と氷
……大なる自由を有するもの……苦痛とか煩悶とか……絶對の
中の一波一瀾……主觀も客觀も空無……誰れか汝を縛せしや……
原因結果の法則……よく樂天に快活に……壽命も汝が自から造
る……悠揚浩蕩として……脱落脱落……險夷原不滯胸中……華嚴經
……大莊嚴經……羅狀元……悟後の活動……全世界は一大樂園

絶對の大自在境とは何れを指していふのであるか。一體人生の自由を得
ないと云ふものは、我れと、我れ以外のものとの矛盾撞着から來るので
ある、これが根本的に人生を束縛する所以のものである。故に吾人もし
この我れと我以外、即ち主觀と客觀との間に矛盾なく、撞着なく、天地
萬物同體との境に入つて、圓融無碍自在となるに至つたならば、即ちこ

れ大悟底の境界にして、大解脱の真人と云ふ、そこで所謂絶対の自由自在なるものも此に發生するのである。彼れ孔子の如き、七十にして漸く心の欲する所に従つて規を踰えずと言ふに至つたのもこの消息を少しく得たのであるのだ、而し大いに得たとは云へぬのである、真正の自在在境とは言ひ得ないが、略ぼ足其の里門に達したとは謂はるゝであらう。蓋し自己の心の欲する所、即ち主觀と、外界の客觀とに矛盾なく、撞着なくして、其の欲するところに従つて規を踰えざるを得るのである。彼の水を看るがよい、其の流れて濛々たるは、水よく外界と矛盾なく、撞着せぬからである。然るに彼の水に到つては既に水のやうにはゆかぬ、他と矛盾し、撞着して遂に破碎さるゝのである。これは言ふまでもなく、水は全く無自性的であつて、己我を立せぬから無碍自由である。氷は之れに反して己我を立するから他を容るゝことができぬのだ、これを以て有碍不自由である。之れに由つて之を觀ると水は能く解脱せるものと謂

ふべしだ、然れども水は全く無爲無能であるからとは謂はれぬ。水は全く無我なのだ、であるから能く其境に應じて調和ができる、これを以て天地風なれば静止して澄然、宛ら明鏡の如しである。而し一朝風雲の起るときんば、猛然として起ち、轟然として興り、怒濤天を衝き、澎湃鞞鞞、山嶽をも破壊するの勢を示す、然し其事やむ時は復た悠々としてもとの静止體となつて澄然たり、湛々たる状態となる。かゝる大變動大活劇も水そのものに於ては自ら之れを知らぬのである。又彼の魚介の類をして自由に游泳せしめ、船舶を載するも尙ほ且つ重しとせず。明月の來りて影を宿すも妨げざるのみか、或は人類をして汚物を流さしむるも怒ることなく。將た桑田の變じて海となることありとも關するところなく、天と、地と、生物と無生物とを容れて、淡然として處り、平然として安んじ、時には洵然として吾人人類を嘲るものゝ如くである。人たるものも亦よくその水の如くなることを得たならば、眞に大悟徹底の境地

に到り得たものであらう。
 更に一層大なる自由を有するものは大空である。宇宙である。彼れは矛盾なく、撞着なく、幾億千萬年を経過するも、曾て一毫の増減したるものなし、無量無数の諸天體を包容して其の大を誇らず、彼れ自らは宛がら何事をも興り知らざるものゝ如くである。然して宇宙史上、如何なる事變に遭遇するも冷然としてこれを傍觀し、我れ關せず焉とすまして居る。黒霧白雲、東より、西より、南より、北より、或は驅り、或は留まり、或は湧き、或は消え、或は沛然として雨となり、或は熙々として白日を現す、人は悲み、人は喜び、人は啼き、人は笑ふも、彼れに於ては何等の痛痒をも感じない。泰然たり、悠々たりだ、これ他なし、彼れ元來自性なく、個我なく、矛盾なく、衝突なく、撞着なく、能く大宇宙に同化し、大宇宙となりきり、大宇宙に脱落するからであるのである。人もまたさうである。其の思ふことゝ、爲すことゝ、其の他外界から彼

れに仕向けることに、毫も矛盾なく、撞着なきに至つたならば、即ち水の如く、又大空の如くであつて、全く大自由大自在の境界に逍遙悠遊することを得らるゝのである。
 元來人に苦痛とか煩悶とかがあるのは、前にも述べた如く其の思ふことと外界とが矛盾し、撞着するからである。言ひ換ゆれば人間萬事意の如くならぬからである。されば悟道と云ひ解脱といふもこの矛盾、この撞着がなくつた當體をいふのであつて、吾人が修行とか、參禪とかいふのは如何にして此の矛盾と撞着とを去るべきかを研究工夫する方法である。これも吾人が屢々前に述べ來つたから、今更喋々する必要はないが、人は元來苦痛すべき自體もなく、煩悶すべき個我もなく、唯これ絶對の中の一波一浪である。然るを強ひて一寸平方許りの水を別に分有し、そして殊更ら之を區劃して、以てそれを我となし、氷の如く固まつて物に撞着し、矛盾し、衝突して、遂に自ら苦痛を求め、煩悶をなし、自ら好ん

で不自由の境に蟄居するに至るのである。是に於てか悟れるものは憐れまざるを得ぬ、あゝ汝はあまりに小心なればなりだ、汝よく汝の無性を悟り、主観と客観、心と物、我れと彼れの區別なきこと、否、主観といひ、客観といふものも畢竟空無なることを自覺したならば、汝の靈體は天真に安住して惑はざるを得るであらう。汝を束縛する物は何物でもない、唯汝自らであることを悟り得るに至るのであらう。達磨大師に或る僧が對つて『大慈大悲を垂れて我が爲めに何とぞ解脱の法を教へ給へ』と、いふた時に師が『誰れか汝を縛せしや』と反問された、こゝにおいて僧は豁然大悟したとあるのもこゝの消息なのだ。

人生茫茫たり、漠々たり、毫も汝と矛盾せぬ、また撞着するものが決してあるわけではないのだ。蓋し萬有は無性空無なるが故に、事實と思はれるとも必しも事實でない。されば天下に大成功、大事業を成し遂げたといふても、決して誇るには足らぬ、愉悦するには足らぬ。萬有は畢竟

空なるが故に汝も亦空である。他人も亦空である。大失敗を演じたとして、悲しむに足らぬ、憂ふるに足らぬ。大功業も、大失敗も、また空である。されども原因結果の法則は、無性の上にも顯はれる、空無の上にも顯はれる。故に諸の悪因は罪果を招き苦罰を招き、善因は即ち幸福を來すのである。されどもこれはたゞ凡愚庸劣の輩の爲めに言ふのみだ。吾人が絶對の大自在境に遊ぶの身となつた上は、自から何の悪事も爲し得られぬことゝなる、假令之を爲し得るとするも、自然汝は社會に矛盾し、撞着することゝなる。汝既に矛盾と撞着とを離れたならば、何ぞ社會に背いて矛盾、撞着を敢てし得んやだ。

魚の水中に在つて潑刺たり、鳥の空中を翔遊して悠揚たるが如く、汝は宇宙の間に安住し、天地の間に悠遊して、能く大自在に、よく樂天に、快活に、生を愉んで居るがよい。世界は汝が欲するまゝである、汝もし、能く矛盾撞着を去つて社會に容れらるゝことを得たならば、宇宙は一相

であるから、汝も亦能く世界を容れて悠々自適することが出来るのである。この當體を絶対の自在境と云ふのである。

汝は到底運命に支配さるゝことを免れぬと思ふて居る。依て運命に従ふことを以て天命を知つたなどいひ、徒らに之れに盲従してのみ居つてはならぬ。一體世界を欲するがまゝに左右し得る汝であるから、運命も亦汝が自ら之を開拓すべき筈である。汝の壽命も亦汝が自ら造り得る筈である。禍福も亦汝が之を擅にし得る筈である。即ち汝が心の持ちやう一つによつて自由自在になるのである。藐たる姑射の神人、肌膚氷雪の如く、渾約として處女の如くなるものも、決して五穀を食はず、風露を吸飲して居る故ではない。汝よく飄々として飛龍に跨り、四海の外に遊ぶが如く、悠揚浩蕩として毫も世事に心を痛めぬがよいのである。汝の皮膚は皴よらず、汝の骨は硬ばらず、汝の頭腦は衰老せず。汝の心靈は大悟底を経て明鏡の如く、しかして汝の相貌は長しなへに童顔にして麗

はしい、宛がら渾灼として珠の如くである。何ぞ五十年の短星霜にして終らんや、汝の壽命は汝の修養にある。精神の修養の結果は第一相貌に形はれ、次に身體及び、遂には長壽無窮なることを得せしむるのである。貝原益軒は其養生訓に『養生の要は心を平にし、氣を和するにあり』といふてゐる。汝を措いて他には宇宙も萬象もない。豁然として汝本來の面目を悟り得たならば、汝は即ち塵世の外に超脱したのである、而して又能く世界を包容することが出来るのだ之れを道元禪師が

身心脱落、脱落身心、脱落脱落

と言ふたのである。

又、陽明の詩に

險夷原不滯胸中、何異浮雲過大空、

夜靜海濤三萬里、月明飛錫下天風、

といふたのである。未だ少しく穉氣を脱しないが、髣髴として陽明の見

識を窺ふに足るではないか。華嚴經に

如來の成正覺は、一切の義に於て觀察する所なく、法の平等に於て疑惑する所なく、形もなく相もなく、行もなく止もなく、量もなく、際もなく、有無の二邊を離れて中道に住み、一切の文字言説を出で、一切衆生の心念の行するところの根本性の樂欲、煩惱の染習を知り、一念中に悉く三世一切の諸法を知るなり。譬へば大海の普く能く、四

天下中の衆生の色身の形像を印現するが如きなり
と、これもとより解脱の自在境に到達したものでなければ望み得られぬのである。

前章に於いて屢々述べ來つたやうに、汝の外には世界はないわけであるから、汝能くこの自在の境を得て、悠々自適、大いに天を楽しむべきである。大莊嚴經にこゝの消息を述べて

菩薩は餘事を覺らず、但自心を覺る、何となれば、自心を覺るものは、

一切衆生の心を覺ればなり。若し自心清淨なれば一切衆生の心も清淨なり。自心の體性は即ちこれ一切衆生の心の體性なり。自心の垢を離るれば、一切衆生の心垢を離るゝなり。自心の瞋を離るれば、一切衆生の瞋を離るゝなり。自心の癡を離るれば、一切の衆生の癡を離るゝなり、是の如きを一切智覺者と名くるなり。

とある。又羅狀元の詩に

人生紛々一筆勾、林泉樂道任遨遊
蓋聞茅屋牽蘿補、開箇柴門對水流
得刻間眼真可樂、吃些淡飯自忘憂
眼前多々英雄輩、爲甚來由不轉頭

と、狀元は稍々箇中の趣味を解せるものゝやうだ。蓋し古來幾多の英雄豪傑なるものは、皆それが欲望のために使はれ、無事を殺し、他人の領土を奪ひ、史上に大いに光彩を放つたけれども、もし大悟界より之れを